

第3回名桜文学賞受賞作品集



第三回 名桜文学賞受賞作品集

第三回名桜文学賞受賞作品集 目次

小説部門

最優秀賞 都市のメタファー 宮森 日向／1
 奨励賞 雨に沈む 島根たろう／25

詩部門

最優秀賞 而今 にこん 琴森 戀／53
 奨励賞 南の島で悲劇のヒロインぶってみた 上原 陽子／57
 奨励賞 新北風（みーにし） 森山 高史／61
 奨励賞 水槽 藍原 知音／65

短歌部門

最優秀賞 見送ってばかりだ 外田 さし／69
 奨励賞 挽歌「挿し色」―屋良朝春先生へ― おり ざ／70
 奨励賞 精霊の森 せいれいのもり 宮城 里子／71
 奨励賞 月の砂 紺野 朔也／72

エッセイ部門

最優秀賞 月光色の布 森山 高史／73
 奨励賞 わたしの弟 虹野 チロ／79
 奨励賞 きおく 梧藤 千沙／82

俳句部門

最優秀賞 初七日 元澤 一樹／87
 奨励賞 戦争と〇和 外田 さし／88
 奨励賞 そつと歌 知名 凜音／89

琉歌部門

最優秀賞

島言葉と季節
〔方言〕

宮城 盛吉／93

奨励賞

宮城 里子／94

奨励賞

謝花 建松／95

奨励賞

前原 武光／96

最優秀受賞者
コメント

小説部門

詩部門

宮森 日向／97
琴森 戀／99

琉歌部門

宮城 盛吉／101

選評

小嶋 洋輔

小説部門
エッセイ部門／103

玉代勢 章

小説部門／110

あずさゆみ

小説部門／114

西原 裕美

詩部門／117

吉川 安一

詩 短歌部門

エッセイ部門／120

屋良健一郎

短歌部門／123

小番 達

エッセイ部門／128

おおしろ建

俳句部門／130

波照間永吉

琉歌部門／135

照屋 理

琉歌部門／137

※巻末に募集ポスター、記念写真を掲載

奨励賞 沖繩の姿 夏から秋
奨励賞 夏

ルディセル泰子／90
佐藤りいら／91

表紙

『あけの海』

原画 デザイン
ステンドグラス製作
帆足デザイン研究所
沖縄ステンドグラス

小説部門

最優秀賞

都市のメタファー

宮森 日向／1

奨励賞

雨に沈む

島根たろう／25



小説部門

最優秀賞

都市のメタファー

宮森 日向

曇天にそびえ立つ東京タワーを、車の窓から呆然と眺めていた。

タクシーは首都高を南下していた。たぶん、南下していた。あるいは南下なんてしていないかもしれない。目的地は南の方向にあり、車がそれに向かっていることは確かだ。けどわからない。それは僕の知る単調で直線的な高速道路とは何から何まで違っており、したがって車が首都高のどこをどの方向に走っているのか皆目見当もつかなかった。そのなかで東京タワーだけがくつきりと見てとれた。東京タワーは誰でも知っている。

都市を覆う重たい雲。それを懸命に貫こうとする、赤く巨大な人工物。不意に、僕はそれが男性器の象徴であることを明確に理解した。仮説ではない。「あれは男性器を象徴しているものかもしれない」ではない。「あれは男性器を象徴しているものだ」と断定的に知ったのである。数学の定理なんかと同じ、揺らぐことのない世界の真理として。

僕は眠たかった。寝不足な上に朝から移動続きで疲れていた。

静かな車内にはラジオのニュースだけが流れていた。機械的な男性アナウンサーの声が耳から脳みそに直接侵入してきた。ウクライナではまだ市民が死に続けていた。停戦交渉は平行線の一途だった。話している言語が違ふからだと僕は思った。一方は自国の言語をしゃべり、もう一方も、彼らの国の言語を好き勝手しゃべっているのだ。何かが伝わるはずない。戦争に関係あるのかないのかよくわからない日本人が作った詩を、アナウンサーが機械音声よろしく読み上げていた。僕は目を擦ったが、擦る前と後で眠気の度合いが増減することはなかった。東京タワーがマンシヨンの影に隠れ、また姿を現した。それは依然、男性器のままだった。

東京タワーははつきりと男性器だった。大都市という一つの生命体を持つ立派な一物。母なる天空を孕ませたいという人類の潜在願望の顕れ。それは同時に、都市そのものの繁栄を示す機能も担っていた。現実の男性器が彼自身の繁栄を暗示する機能を有するのと同じように。したがって東京タワーは常に自己顕示的で、露出願望的だった。そうわかると、僕はほかの高層ビルも男性器に見えて仕方なかった。都市にはあらゆる種類の経済エネルギーが群集合的に——まるで机上の砂鉄が磁場の変化によって斑状になるように——偏在しており、その表出として、地面から男性器が何本も持ち上がるのだ。あるいは経済エネルギーとは都市の地下に仰向けに横たわる巨人のようなもので、高層ビル群はそのうち特に精力の強いものが興奮し勃起した結果だった。要は男性器の上場である。都市の人びとはその勃起のなかで——あるいは勃起を支えるために——経済エネルギーを生産・循環・消費する代謝機能だった。巨人たちのヘモグロビンであり海綿体

であり精母細胞だった。

ふと、果物の匂いがした。どこことなく南国風の、パイナップルとかマンゴーとかを連想するような匂い。そして官能的イメージ。僕はその匂いの名前を思い出そうとした。けれどもそれは陽炎のように、手を伸ばすとすぐに消えてしまった。

どこからかパトロール・サイレンが聞こえた。最初は夢うつつの脳みそが創りだした幻聴かと思った。しかしその音は次第に大きくなり、やがてはつきり後ろから響いてきた。僕は無意識のうちにバックミラーを見た。そこで意図せずタクシードライバーと目が合った。ドライバーも後方を確認するところだったのだ。僕は思わず咳払い、気まずさを隠すように直接後ろを向いた。案の定パトカーが接近中だった。タクシーは減速し、走行車線に入って道を譲った。数台のパトカーが前方へかなりのスピードで——レーシングカーが立てるような重たいエンジン音を轟かせて——走り去っていった。それが過ぎるとタクシーは即座に追い越し車線に入った。ドライバーは走行車線に何かしら恨みがあるみたいだった。

料金メーターに無音で数字が加算された。その様はどこことなく陰湿で、浅ましかった。あくびの気配を感じたが、それはあくびを形作る前にどこかに行ってしまった。僕はため息をついた。

「事故ですかね」とドライバーは言ってきた。少なくともひとり言の音量ではなかった。「もしそうなら、まずいな。今に渋滞が発生しますよ」

「……三時に間に合いますか」僕は何か言わなければならないような気がして言った。時計は二時過ぎを示していた。

「たぶん大丈夫だと思うけど、どうだろうなあ」とドライバーは場違いに大きな声で言った。「うーん、わからん。こればかりは何とも言えないですね」

僕はいちおう飛行機の手ケットを確認した。一五時三十分羽田発、那覇行。それから口を大きく開けてあくびをした。今度はちゃんとあくびの形を成すことができた。

「大丈夫です。急ぎの用じゃないですの」と僕は言った。「窓を開けても良いですか?」

「ええ構いませんよ」とドライバーはバックミラーを見ながら言った。その中年ドライバーは頭頂部の毛髪が薄くなっており、縁の太い眼鏡をかけていた。バックミラー越しに見た彼の顔は——大抵の中年ドライバーがそうであるように——眼光だけがいやに鋭かった。きつと仕事中ほとんど常に車道の前方を注視しているからだろうと僕は思った。あるいは緊急車両や遅い乗用車に睨みをきかせる機会が多いからかもしれない。

僕はこぶし一つ分だけ窓を開けた。高速道路の風が車内に入ってきた。眠気覚ましにはならず、むしろ余計に不快な気分になった。けれどもドライバーに断った手前、一定時間は空けておかなければならなかった。

「しかしお客さん、いくら急ぎじゃないたって、飛行機の時刻があるんじゃないんですか?」しばらくしてドライバーは言った。「それとも空港には別の用事で?」

「……いえ、飛行機には乗らないといけないんですけど……大丈夫です。本当は無理して今日中に帰る必要もないんです」

「ほう。ちなみにどちらへ?」

「沖縄です」と端的に答えた。

「はあ、へえ、そうですか」とドライバーは過剰に反応した。僕はなんだかむっとした。

「お客さん沖縄の人だったんですね。もしかしてあれですか、復帰五十年がらみのやつですか？私、今朝NHKで見ましたよ。復帰五十周年特集、みたいなやつ。しかし今の若い子たちは沖縄が昔アメリカだったことを知らないんじゃないかな。だってあれは私がまだ小学校の頃の話だもの。ああ、そういえば首相も今日は沖縄に出向いているらしいですね。あつちで大々的なイベントをやるって言うってたかな？」

「いえ、それとは関係ありません」と僕は手元のチケットを眺めながら答えた。日時の欄に「5/15」と記載されていて、僕は面倒な気持ちになった。それからふと思い出し、窓を閉じた。車内がまた静かになった。

「祖父が亡くなったんです」

「ああ、なるほど」とドライバーは言った。「失礼しました。そうですね、おじいさんが……。実を言うとね、私も最近母を亡くしたんですよ。とは言っても、あれももう半年前ですがね。それに母はもう九十歳でしたから、大往生ですよ。本人ももう充分だと思ったんじゃないかな、死ぬときは安らかなもんでしたよ。ほんと、永い眠りについてたって感じで」

僕は何も言わなかった。別に見ず知らずの他人がどう死んだかなんてどうでも良かった。どうしてそんな話をしてくるんだと僕は思った。それよりも僕は一刻も早く眠ってしまいたかった。さつきから幾度となく入眠を試みているのに、まだ一度も成功していないのだ。料金メーターが

また無音で数字を加算した。

「お客さん二十歳くらい？ 若く見えるけど」

「……はい」とだけ僕は答えた。頼むから寝かせてくれ。

「やっぱり。大学生かい？」

「……ええ」

「最近の若いのはみんな大学に行くからね。何をするにもまず大卒、大卒だよ。私の頃は一部の都会の金持ちだけだったのに。ちなみにどこの大学？」

「……筑波大学です」

「ほう。筑波ってあれだよな、万博の」

「……だと思えます」

「へえそうかい、君頭良いんだね」とドライバーは言った。「すごいね、私なんか家が貧乏だったから、もともと大学なんて行けなかったんだよね。ああそう、そういえば最近甥っ子が東京の大学に受かったって、親戚一同でお祝いしたんだよ。早稲田だったか明治だったか、忘れちゃったけど。……それで、うちの息子二人にも勉強しろって言ってるんだけど、どんなもんかね。毎日遊んでばかりだよ、あいつらときたら。高校も大したことないところで、一応私立には行かせているんだけどね……」

僕は話を聞いていなかった。それよりも流れていく景色を呆然と眺めていた。乱立する男性器の群れは僕を不安にさせ始めた。あれらは一体何の為に建っているんだろうと思った。あるいは

本当に天空の世界を目指しているのだろうか。聖書に出てくるバベルの塔のように？　だとすればあまりにばからしい。信じられないことだ。しかし理屈とは裏腹に、実物は確かにそこに建っていて、タクシーで移動する僕を悠然と見下していた。己の頑健な勃起をただひたすらに誇示してきた。内地ではそれが当たり前だった。ここではわかに信じ難い道理が当然のようにまかり通るのだ。

アメリカ？　沖繩がいつアメリカだったのだろうか。僕はそのことを知らない。

幾度目かのあくびをし、その後、意識が徐々にシートカバーに溶けていった。雑音が世界の奥の方へ遠のいていった。やがて僕はやつと入眠を果たした。

*

僕はテレビを見ている。

燃える車、人々の歓声、服を脱ぐ女、銃声、空爆、火を放つ兵士達、熱い素肌、果物の匂い、官能的イメージ……

タクシーが急減速し、身体が揺さぶられた。僕の意識は眠りと覚醒の汽水域から無理やり引き戻された。よくわからない夢を見ていた気がするが、内容はもう思い出せなかった。首と肩の間地点が鈍く痛み、かすかに頭痛がした。目を擦って前方を見ると、視界の奥まで車が詰まっていた。ひどい渋滞だった。これが噂に聞く首都高の渋滞かと僕は他人事のように思った。心なし

が先刻より雲の厚みが増しているみたいだった。東京タワーはすでにどこにも見えなくなっていた。代わりに東京湾がすぐそこにあり、臨海工場が建ち並んでいた。

「ひどいな、こりゃ」とドライバーが言った。「前のほうで事故があったみたいですね。もしかすると間に合わないかもしれません」

大丈夫ですと言おうとしたが、喉が詰まって上手く声が出ず、仕方なく言葉を飲み下した。そしてわざとらしく咳払いをした。時計の針は二時半を指していた。チケットを確認すると、依然出発時刻は十五時三十分だった。当たり前だ。目を離れた隙に紙の数字が入れ替わったりはしない。ラジオではさつきと同じアナウンサーが沖縄の本土復帰五十周年について触れており、普天間基地が云々と聞こえた。どうやら宜野湾のコンベンションセンターで式典が行われているらしい。現首相が事務的な口調でキャンプ瑞慶覧やら何やらとスピーチをしている音声が流れた。僕は東京のタクシーでそれを聞きながら、困惑した。内容ではない。聞きなじみのある地名を、全く離れた土地で聞くこと自体に違和感を覚えたのだ。

僕は沖縄で生まれ育った。反戦教育をしつかり受けてきたし、通っていた高校は普天間飛行場の目と鼻の先にあつた。軍用機が上空を通るときはちゃんと煩かった。煩かったことは覚えている。が、それがどんなものだったかはこの一年で忘れてしまっていた。代わりに僕はこの一年で、暴走族の煩さをよく知った。つくば市の公道にはその手の連中がよく通るのだ。道が広く、雨の日が比較的少ないからだ。

タクシーは文字通り亀の速度で進んだ。歩いた方が数倍速いのは明らかだった。しかし誰も車

の外に出ることはできない。首都高の渋滞には逃げ場がなかった。それこそ高架橋から飛び降りる以外は。隣の車線のドライバーの顔がよく見えた。当たり前だが、みんな渋滞にうんざりしていた。渋滞を喜ぶ者はただ一人もいなかった。iPS細胞とは違う、と僕は思った。なぜ急にiPS細胞が思い浮かんだのかはわからない（きっとまだ眠たいせいだ。眠気は見当違いな連想を誘発する）。とにかく、渋滞はiPS細胞とは何から何まで違った。iPS細胞は人類の科学の発展に貢献するのみならず、今後実際に直接的に人びとを助けるに違いなかった。たとえば誰かしらの身体に関する切実な悩みが、これによって根本的に解決されるかもしれない。しかし渋滞は、これを喜ぶ者は一人もない。それは渋滞がどう足掻いても希望たり得ないからであり、進歩よりも停滞の意味を持つからだだった。女性器も男性器も暗喩できないからだだった。

僕は渋滞を眺めながら、ふと尿意の予感を覚えた。すぐく嫌な予感だった。少なくともこの先高速道路上にコンビニとか仮設トイレとかはなさそうだし、仮にあつたところで寄る時間もない。僕は、きつと神経質になつていただけだと考えることにした。そして必死に膀胱のことを考えないように努めた。ところが考えないようにすればするほど、尿意はエンジン音に呼応して体の奥で肥大化した。僕はため息をついた。ガムかフリスクを持つておけばよかったと思った。あるいはタバコを持つておけばよかったと思った。もし僕が今タバコを持つていて、かつタバコを吸う習慣があればどれほどよかっただろうと思った。しかし残念ながら今の僕はそのどちらも持ちあわせていなかった。

唐突に、車内の静寂を着信音が切り裂いた。僕のポケットからだ。携帯を取り出すと、画面に

は「美咲」と表示されていた。僕は一瞬戸惑った。けれども結局着信を取った。

「もしもし」

「もしもし、ヒナタ？」とミサキの声がした。

「そうだよ」

「久しぶり。元気？」

「健康ではあるよ」と僕は答えた。

「そう、良かった」とミサキは言った。「ねえ、今って時間ある？」

彼女の声を聞くのは数ヶ月ぶりだった。僕は相当久しぶりに感じた。少なくともここ数ヶ月間、僕と彼女は全く会話を交わさなかった。電話さえしなかった。久々の彼女の声は心なしか以前より湿っていて大人びている気がした。

僕は意味もなく腕時計を見た。「大丈夫だよ」

「ねえ、ヒナタが今日帰ってくるのって本当？」

「そうだよ」と僕は乾いた声で答えた。「祖父の葬式があるから。けどどうして急に？」

「うん。確認したかっただけ。ねえヒナタ、なんでこの前の同窓会行かなかったの？」

「同窓会？ ああ、三月のね。あれは時期が合わなかったんだ。別にあって、グループの半分も参加していなかっただろう？」

「私がいると思ったから？」とミサキは言った。

「いや、関係ないよ」と僕は答えた。「関係ない」

「私、結局同窓会には行つてないよ」とミサキは言った。「ヒナタがいないなら私も行く意味ないと思つて」

僕は黙つた。僕は一体何を言えば良いのだろうかと思つた。いや違う。そうじゃない。彼女のほうが何かを言いたがつているのだ。僕に何かを訴えたがつていて、それで電話してきた。だつたら僕が余計なことを口にするべきではない。

また果物の匂いがした。あるいはそのような予感がした。

「あのさ、ヒナタ……ヒナタは今悲しい？」とミサキは出し抜けによくわからない質問をした。「え？」

「今どれくらい悲しいかつて聞いているの」

「それは祖父が亡くなったからつてこと？」

「当たり前でしょ。それ以外に何かあるの？」

「そりゃあ悲しいよ」と僕は言つた。「すごく悲しい。僕はずっと祖父に良くして貰つていたんだ。家も近かつたし、小さい頃は毎週のように遊びに行つていた。祖父の家には僕と従兄弟のおもちやがいっぱいあるよ」

「じゃあ泣いた？」とミサキは尋ねた。「ヒナタはおじいちゃんが亡くなつたつて知つたとき、涙を流した？」

「……いや、泣かなかつたよ」と僕は正直に答えた。

「一度も？ 別にその瞬間じゃなくても、おじいちゃんが亡くなつたことを知つてから今この瞬

間まで、一度も泣いていない？」

「……そうだ」と僕は言った。「けど勘違いしてほしくない。僕は本当に悲しいんだ。ただ祖父がちよつと前から病気で入院していたことも知っていたから、心の準備がなかったわけじゃないってだけで。だから、なんだろう……泣いたか泣いていないかで気持ちの大きさを決めつけられたくはないよ」

「うん」とミサキは言った。それから黙った。

ミサキは沈黙によつて何かを推し量った。息遣いだけがうつすらと聞こえた。電話越しに彼女の上目遣いの批難的な表情が見えるようだ。僕は彼女がたびたび会話の途中で突然黙り、相手の目を見つめていたことを思い出した。彼女は沈黙にものを言わせるのが得意だった。

「でも、泣いてないんだね」とミサキは呟いた。

「いやだから」と僕は言いかけてやめた。こんなところで言い合いをしても仕方がない。僕は彼女と話すときによく覚えていた感情を数ヶ月ぶりに思い出し、音のない深い息をついた。どこからかクラクションが聞こえた。誰かが誰かに腹を立てていた。首都高は依然としてひどい渋滞だった。

「……そうだよ、僕は泣かなかった」と僕は認めた。「それが事実だ」

「そっか」とミサキは言った。「ヒナタは泣かなかった。……泣けなかった、のかな」
勘に障る猫撫で声。泣けなかつた？

いや違う、と僕は思う。そうじゃないだろう。僕が悪いわけじゃない。僕はもう二十歳だ。高

校生の頃とは違う。筋の通ることと通らないことの違いを理解したのだ。理不尽を理不尽だと明文化する力を身につけたのだ。この内地で僕は色々なことを学んだ。島の片隅にいた頃とは違う。だからもう騙されたりはしない。

「それで、君は一体何の用で電話をしてきたんだ」と僕は語調を強めて言った。「まさかこれと言うただけに電話してきたのか？ もしそうなら——」

「ううん、違う」とミサキは否定した。「ねえヒナタ、もしヒナタが良ければいいんだけど……今日の夜、会えないかな」

沈黙。エンジン音だけが空転を続けていた。僕の目線はさつきからずつと海岸沿いの工場群に向いていた。得体の知れない工場の煙突から、得体の知れない灰色の煙がもくもくと立ち昇っていた。東京湾は海の色が汚かった。それは東京の空の色が汚いからだった。

「……今なんて」と僕は言った。

「今日の夜、会えないかなって言った」とミサキは繰り返した。「だってほら、私たち最後に別れたとき、全然ちゃんと話せてなかったじゃない。私、わりと後悔してる。最近やつとそれに気づいたの。それに私、時間が経って冷静になつてさ、やつぱり……」

彼女は言葉を飲み込んだ。僕は黙って続きを待った。タクシーは先程からほとんど動かない。あるいは本当に飛行機に間に合わないかもしれない。

「とにかく、ヒナタともう一度だけ会って話したい。イヤかな？」

「……今日？」と僕は尋ねる。

「うん……今日が良い」

「でも」

「わかってる。おじいちゃんのこともあるし……けど、これを逃したら私、もうヒナタと会えない気がするの」

「そんなことない。……飛行機はいつでも出ている」

「そういうことじゃない」とミサキは低く抑えるように言った。「ヒナタは何もわかっていない。飛行機とか、そんな問題じゃない。私が問題にしているのは……ヒナタ自身のこと」

「僕に何か問題があるっていうのか？」思わず語気が強まる。「だいたい君はいつも僕のせいにする。前のときだってそうさ、僕はそれが」

「そうじゃない、お願いヒナタ聞いて」とミサキは懇願するように言う。「私が言いたいのね、あの時私たちはああやって別れるべきではなかったっていう——」

その時だった。

窓の外の光景が僕の目に入ってきた。ちょうどタクシーが事故現場に差し掛かるところだった。地上十メートルほどの高速道路上に、数台のパトカーと何名もの警察官、フロントに凹みができた大型トラック、そして大破した自動車——もはや車の原型を留めていない鉄の残骸——があった。何台もの車を巻きこむ玉突き事故だった。特にトラックに直接追突された車はひどい有様だった。後ろから押されてそのまま前の車と板挟みにされたのだろう、前後から圧縮されて異様に小

さくなっていた。窓ガラスのほとんどが辺りに飛び散っており、残っている部分もひび割れて白く濁っていた。後部座席のドアが半開きになっていた。普通なら考えつかないような、ドアそのものの尊厳を踏みじめるような開き方だった。その光景は骨折した人の関節が奇妙な方向に折れ曲がっている様を連想させた。フロント部から、まるで死体の腹から臓物が溢れ出るように、かつてその車の動力源だった機械たちが飛び出していた。辺りには大破した車のものとおぼしき鉄くずが飛び散っていた。この事故によって左の車線が潰れており、その右を多くの車がゆつくりと通っていた。クラクションがまた鳴った。携帯からは女の喚き声が聞こえた。僕の名前を連呼しているようだった。けど僕はその光景から目が離せなかった。

耳鳴りがした。キーンという扁平な音が世界を満たした。僕は呼吸の仕方を忘れていた。タクシーは事故車の真横をゆつくり通った。黄色のナンバープレートがくしゃくしゃに折れ曲がっていた。潰されたのは軽自動車だった。なかには誰も乗っていないかった。当たり前だ。ずっと前に救急車で運ばれたに決まっている。少なくとも軽傷で済む事故には見えなかった。あるいは搭乗者全員が即死したかもしれない。その可能性は否定できない。全然否定できない。

軽自動車の残骸の前には大型乗用車があった。たぶんスバルとかレクサスとかその辺の、フレームに力を入れているブランドだろう。車体は前後のへこみ以外ほぼ無傷だった。文字通り、無傷。ここまで差が出るのかと僕は思った。これほどまでにはつきり、目に見える形で違うのか、と。目眩がした。重力が出鱈目な方向に向いているみたいだった。悪い夢をみている時の気分だった。携帯はまだ何かを喚いていた。煙突からは永遠に灰色の煙がもくもくと立ち昇っていた。工

場で何かが燃やされ続けていた。

もくもくもくもくもくもく。

僕は事故現場を眺め続けた。ただただ言葉なく眺め続けていた。

*

不意に体が後ろに引かれた。タクシーが急加速した。事故現場を過ぎて渋滞域を抜けたのだ。事故車もトラックも大型乗用車も、拍子抜けするくらいすぐに見えなくなった。タクシーは海上の高架橋を何から逃げるように駆け抜けた。周りの景色がどんどん後方に吸い込まれていった。僕は一体何を見ているのだろうと思った。僕は今どこに向かっている？

原因不明の吐き気が僕を襲っていた。体内に入ってしまった得体の知れない何かを速やかに吐き出してしまいたいのに、吐き出すべきものがどこにも見当たらなかった。だから仕方なく空気を嘔吐した。脳に杭を打つようなひどい頭痛がした。耳鳴りがひどくなっていた。僕は今すぐ脳みそを引きちぎって高架橋から投げ捨てたかった。

耳元の携帯から誰かが何かを言っていた。ミサキだ。僕は彼女と話しているところだった。しかし僕は相手の喋っている内容がもはや何ひとつとして理解できなくなっていた。ねえちゃんと話聞いているのとミサキが言っていた。お願いだから適当に返事しないで？ もちろん僕は言っていた。僕はいつだって君の話をちゃんと聞いている。けどわからないんだ。君の話は一体どこを目

指しているんだ？ どこに向かっているんだ？

「もちろん」とだけ僕は言った。それだけだ。僕はもう疲れていた。

「ねえヒナタ」ミサキは涙声になっていた。「ヒナタはきつと、私の話を本当の意味で聞いたことってないんだろうね」

「そんなこと」

「ううん、いい」とミサキが制した。「わかっている。ヒナタは絶対そんなことないって言うの。いつもそう言ってくれる。けどそれって結局、口だけでは何とでも言えることじゃない。実際に、ヒナタが変わってくれたことはない。わかる？ 何一つ変わらないの。言う前と後で。それで私はどうしようもない気分になるの。すごく惨めな気分。ねえ私、はつきり言ってヒナタと話すときすごく辛くなるの。私にはどうすることもできないんだっていう無力感がね、まるで鉛みたいに私の身体を満たして動けなくなるの」

「すまない」と僕は力なく言った。

羽田空港まで後何キロと書かれた案内標識が目に入った。気がつくとも小雨が降り始めていた。世界が終わる日の朝に降るような冷たい雨だった。ドライバーがワイパーを作動させ、ぎゅっぎゅっとぎこちない音が鳴った。

「すまない」

「いつもそう」とミサキは呟いた。「そうやって謝ってばかり。私を悪者にする。本当に話す気がないからそうやってコミュニケーションを放棄するんじゃないの？」

「違うよ、ただ」と僕は言う。「わからない。僕はあまり器用に話せるタイプじゃないんだ。僕は」
「自分のことばっか」とミサキが言った。「いつもよ。自分のことだけ。自分がどう思ったかとか、
どういう人間だからとか、定義がどうか、そういうことばかり言う。ヒナタは自分のことしか
考えていない」

「そうかもしれない」と僕は言った。そうかもしれない。

沈黙が流れた。ぱらぱらという雨音だけが聞こえた。僕は何かを言おうとして口を開いた。しかし言葉は、現実の言葉になる前に霧散してしまった。言葉を失ったあと、手元には何も残っていなかった。名前もない樹海の最奥に取り残されたような途方もない迷い以外、なにも。

「ねえヒナタ、本当に、これだけは正直に答えてくれる？」とミサキがしばらく経った後に言った。「適当なことは言わないでね、お願いだから」

「言わないよ」と僕は言った。

「私と別れたくないって本気で思ってる？」

「思っている」

「ねえ嘘ならつかなくて良いからね。優しくもなんともないよ？」

「嘘じゃない。本当にミサキと別れたくないんだ」と僕は言った。それは本心だと思う。けどわからない。タクシーは前の車を追い越すために車線を左に移った。しかし前の車も同じことをしたので、タクシーはウィンカーも出さずに強引にもとの車線に戻った。僕は最初からずっとシートベルトをしていた。このドライバーは本当にひどい運転をする。

「優しさでもなんでもないよ」と僕は言う。「君を大切にしたい。この気持ちは高校の頃からほんの少しも変わってない」

「本当？」

「本当だよ」

「じゃあなんで」とミサキは言う。

「え？」

「なんで筑波に行ったの？」

僕は目を瞑った。頭がかすかに痛んだ。完全に堂々めぐりだった。僕は彼女と幾度となくこの話をしたし、それなりの妥協点を見出したはずだった。しかしどうやらそれは単に僕のなかで納得しただけだったらしい。それを主張するように彼女は何度でも、何度でも同じ道を辿ろうとするのだ。

たぶん、そもそも僕と彼女では結論までの道筋の辿り方が根本から異なるのだ。たとえ二人で同じ場所を目指していたとしても、僕は僕用の道しか進めないし、彼女は彼女用の道しか進めない。もし無理やりにでも足並みを揃え、どちらかの道を使って進もうとすれば、もう一人が必ず路頭に迷うことになった。一方が進んでいる気になっても、もう一方は同じ場所をぐるぐると回っているだけにしか感じなかった。あるいは後退しているような気さえるのだ。加えて、今の僕たちは道順どころか、肝心の目的地さえ見失っていた。自分たちが何を目指してどこを進んでいるのか、見当もつかなかった。

「なんだろう」と僕は言った。「忘れたよ」
その言葉は他のどの言葉よりも虚しく響いた。

*

タクシーが海中トンネルに入った。視界が一気に暗くなり、雨音が止まった。そろそろ空港に迫りつつあった。

時計はちょうど十五時を指していた。搭乗時刻まで残り二十分。ぎりぎり間に合うかどうかとあったところだった。ドライバーがバックミラー越しに僕の様子を一瞥した。

「ごめんミサキ、そろそろ飛行機の時間だ」と僕は呟いた。「この話はまた今度、じっくりしよう。また後で連絡するよ」

「わかった」とミサキは冷めた声で言った。逃げ、る、んだね、とでも言うように。「じゃあね。気をつけてね」

電話が切れた。

トンネルの中は暗かった。頭上に並ぶ無数の橙色照明が、順番に高速で飛び去っていった。それらの鈍い光は等間隔で連続することによって、一筋の鋭い光線を模っていた。ラジオからは何も聞こえず、ただざらざらと乾いた音が鳴っているだけだった。トンネル内では全て音が淡く、ぐもつて聞こえた。料金メーターが目に入り、僕は財布から一万円札を取り出した。タクシーは

トンネルの中を、周りの車より二割増しの速度で駆け抜けた。僕は一万円札を握りしめながら、ふと、自分が卵巣を指す精子になったような気がした。女性器の中を我先にと卵子に殺到する精子の群れの一匹になった気分だった。海中トンネルは女性器を暗喩していた。強く暗喩していた。

「間もなく到着しますよ」とドライバーが言った。彼の口調は当初の事務的なものに戻っていた。「どうです、間に合いそうですか？」

「大丈夫そうです」と僕は適当に言った。本当はかなり微妙なところだった。

「急いだほうが良いですよ」とドライバーは言った。「葬式はね、しつかり参加しておくべきですよ。こういうのって自分で思っている以上に後悔が残るものです」

そう言つてドライバーはウィンカーを出して大型乗用車を追い越した。バックミラー越しに一瞬だけ目が合ったような気がした。僕は彼の言ったことについて、そういうものののだろうかと思つた。そもそも僕は本当に祖父の死を悲しんでいるのだろうか。ミサキが指摘したとおり、僕は祖父が亡くなったことを知つても涙を流さなかつた。それどころか葬式に行つて親族と顔を合わせるのが面倒だとさえ思つた。最初に思つたことはそれだったのだ。あるいは僕には何かしら重大な問題があるのかもしれない。これっぽっちもまともじゃないのかもしれない。

無数の橙色光が過ぎ去つていくのを眺めながら、ふと、祖父が沖縄戦で家族を亡くしたことを思い出した。なぜそんな連想が起きたのかわからないが、とにかくそのことがふと頭に浮かんだのだ。そして実際に口に出してみた。「祖父は沖縄戦で家族を亡くしたんです」と僕は言つた。

ドライバーは黙って運転し続けた。急に何を言い出すのだと思っているみたいだった。それは僕にもわからなかった。しかし一度言葉を吐き出すと、そのまま溢れるように出てきて止められなかった。

「祖父がまだ十三歳くらいの頃です。爆撃に備えて親族一同壕の中に隠れていると、米軍の歩兵達がやって来ました。歩兵達は外から片言の日本語で彼らに投降を促しました。壕の中にいた者は皆青ざめ、絶望に打ち拉がれました。日本兵に米軍の恐ろしさを散々教わっていたからです。もしそこに自決用の手榴弾でもあれば、彼らはそこで一人残らず死んでいたでしょう。当然、僕の祖父も。けれども彼らはその手のものを配給されていませんでした。そこでさしあたり、男だけで出て行って様子を伺うということになりました。そのとき壕にいた体力のある男性は、祖父の叔父二人と祖父自身の計三人のみでした。それ以外はみな徴兵されていたんです。彼らは米兵と話をつけてくると言って壕の出口へ向かいましたが、本当に話をつけられるとは全く思っていないませんでした。むしろ出た瞬間に問答無用で射殺されるだろうと思っていました。あるいはそうやって楽に死ねるならまだマシだと。それは文字通り、自ら処刑台に向かうようなものでした。しかし実際に起きたことは——三人が米兵の前に現れて森の地面に手をついたのとはほぼ同時に、米兵は壕の中に一切の躊躇なく火炎放射器を射出しました。きつと出て行くのに時間をかけすぎたせいでしょう。中に日本兵がいると思われたのです。火炎放射器は単に火を放つというより、灼熱の炎の液体を大量に噴射するものでした。それはただの火とは比べものにならないほど執拗で、残忍な炎でした。壕の中は瞬く間に火の海と化しました。叔父の一人が狂ったように叫

びながらその中に飛び込んで行きました。彼の家族がまだそこにいたからです。そして当然、二度と出てくることはありませんでした。祖父は壕の内側が橙色に燃えるのをただ外から眺めていました。家族の断末魔を呆然と聞いていました。中には彼の幼い妹もいました。最後に見た妹は空腹で起き上がれないほど痩せこけていたそうです。

この話は祖父から直接聞いたものではありません。彼は僕に絶対にこの話をしようとしませんでした。代わりに彼はコザ暴動の話をよくしました。知っていますか？ 沖縄が復帰する二年前に起きた住民による暴動事件です。主婦を轢き殺した米兵が無罪になったことを受け、ちよつとした事故騒ぎから住民の不満が爆発し、大勢でMP車両やYナンバー車に次々火をつけて回ったんです。祖父は暴動の真つ只なかのコザにいて、米車両を引つ繰り返すの手伝ったそうです。祖父はその日の話を僕たちに何度だつて聞かせました。『あの日、はじめて沖縄人はアメリカ人に勝ったんだ』と彼は言っていました。沖縄の復帰はあの日彼らが勇敢に戦い、そして勝利した結果なのだと、彼は信じていました」

そこまで言つて僕は喋るのをやめた。僕は何を言っているのだらうと思った。しかも相手は何の関係もない、今日会っただけのタクシードライバーだ。ドライバーは黙つて話を聞いていた。もしくは聞いていなかった。バックミラー越しには表情がよく見えなかった。どうして僕は急にこんな話をしたんだろう？

沈黙が続いた。橙色の照明は炎の色に似ていた。僕は祖父の家族を焼いた炎のことを考えていた。祖父の家族を焼いた炎の色が何色かなんて、僕が知るはずがなかった。それなのに僕は話の

なかで、祖父の家族を焼いた炎が橙色だとなぜか断言していた。そして全く同じ色の炎がコザのYナンバー車を焼いていた。僕はその炎を本当に見たのだ。あるいは実際に現在進行形で橙色の照明に囲まれているせいかもしれない。現実と妄想の区別がつかなくなっている。明喩と暗喩の区別がつかなくなっている。

「急いの方がいいようですね」しばらく後にドライバーが沈黙を破って言った。
何もかも、手遅れになる前に。

やがて道の向こうに白い光が見えた。空港だ、と僕は思った。もうすぐ空港に着く。それと同じ時に、まるで前世の記憶がフラッシュバックするように、強烈な果物の匂いがした。どことなく南国風の、パイナップルとかマンゴーとかを連想するような……。彼女の匂いだ、と僕は唐突に思い出した。この匂いは彼女の身体からのものだった。そして官能的イメージ。それは僕のなかにある島の記憶と限りなく深い場所で結びついていた。光が眩しかった。けれども僕はその光を直視し続け、網膜を焼き続けた。僕はその光に何らかの意味を見出そうとした。暗喩を暴いてやろうとした。しかしそれを果たす前に、車はトンネルを抜けた。

外は、先刻よりも雨が強まっていた。

小説部門

奨励賞

雨に沈む

島根たろう

栗原京子くりはらきょうこからの電話を、木村夏生きむらなつきはいつからか鬱陶しく思うようになっていた。彼女の通う学習塾の定休日にあたる木曜日に、決まって電話がかかる。高校二年生になった京子は、大学受験に向けて励んでいる。夏生は窓の外を見た。いまにも雨が降り出しそうな空だった。夏も終わりがけの季節。

京子は、叔母の娘だった。叔母は母の妹にあたり、夏生が知る中で最も奔放な女だった。叔母ほど自由な人間はいない、と夏生はいまでも胸を張って言える。

京子の父親がまた家にいて、当時小学二年生だった夏生は漫画の影響でサッカーに興味を持ち始め、母と叔母の仲も良好だったあの日。叔母は「外が暑いから」と、突然夏生の家へやってきた。その日のことを夏生は大学生になつたいまも、鮮明に覚えている。確かに彼女の言う通り蒸し暑い夏の昼下がり、父も母も仕事に出かけ、家には夏休み中の夏生しかいなかった。

「夏生くんは似てないね。姉さんみたいに目がつり上がってないし、義兄さんの、うによんって曲がった口でもない。どつちにも似てない。優しくてきれいな顔。いい人の顔してる」

夏生の入れたカルピスをごくごく飲み干し、唇を指先で拭いながらそう言った。夏生は夏休みの宿題をしていた。絵日記がどうしても苦手だった。何を書けばいいのか分からないからだ。叔母はいつもシフォンスカートを履いて、冬でもサンダルを選ぶ人だった。ペディキュアを施した裸足を抱え、椅子に座っているというのに膝を抱えて背を丸める。そんなことをしたら、きつと母に「行儀が悪い」と叱られる。夏生は向かいの席に座りながら、なぜか自分が怒られたような気分になった。

「褒めてるの、それ」

「かつこいいって言うてんじゃない。素直に受け取りなさいよ。そういうところは姉さんそっくりね」

母は実の妹である叔母のことを「母親になれない、いつまでも女でしか生きれない人」と称していた。しっかりとフェイスパウダーの粉がはたかれた肌は、暑さのせいかうつすらと火照っていた。唇はモーブピンクのリップが塗られ、涼し気な右目の下には泣きぼくろがある。夏生はずっと、叔母のことをきれいな人だと思っていた。

「でもだめね。なっちゃんはいいい人すぎるから、引きずり込まれちゃうよ、きつと。変な女に捕まって。私みたいな」

あはは、と口を開けて叔母は笑う。なっちゃんは、叔母がたまにする呼び方のひとつだった。

基本的にこの人は、他人をあだ名で呼びたがる。なっちゃん、なつ、なつきち。どれも子どもっぽくて、夏生は嫌だった。でもたまに、夏生くん、と呼ばれると、心臓がドキドキと波打つ。

「夏生くんは、この夏で、何かしたいことある？」

叔母がこてんと首を傾げて聞く。

夏生は迷うように目を伏せ、意を決して口を開いた。

「サッカー、したい」

「サッカー？ 野球じゃなくて？」

「俺、ゴールキーパーやってみたい」

両親にすら、言ったことのなかった。でも叔母を前にしたら、なぜか簡単に「やりたい」と言うことができた。叔母は微笑を浮かべ、へえ、と頬杖をつく。

「やりたいことはやっておく方がいいよ。若いんだから、遠慮なんかしないで」

自分に言い聞かせるみたいな口調だった。夏生ははにかんで頷き、再び絵日記に取りかかった。でも叔母のことを書いたりはしなかった。絵にした途端、叔母の美しさがつまらないものに成り果てそうで、こわかった。

その翌週、叔母は離婚し、まだ幼い京子を抱いて、ひとり実家へと戻った。それほど遠くはないけれど、それきり叔母はあまり家へ寄りつかなくなった。母も叔母を気にかけていたようだったが、特に首を突つ込む真似はしなかった。夏生もサッカーではなく、母の選んだ英会話に通うことになった。英語を勉強した方が貴方の為になるわ、と優しく笑う母に、本当はサッカーがし

たいとは言えなかった。

夏生の中で、夏と叔母は強く結びついている。夏が来る度に、あの叔母の笑顔を思い出す。叔母は自由な人だった。常に荷物を最小限に抑え、いらぬものは切り捨てる。その姿は空を高く飛ぶ鳥というよりも、流れに沿って泳ぎ続ける魚に近かった。彼女は自分の思うままに、流れに乗って生きたかっただけなのだ。夏生はどうしても、叔母を責める気がおきなかった。むしろ、単純に羨ましいとさえ思った。沈むことなく泳げる力が。

「少しだけ、少しだけでいいの」

その言葉は叔母の決まり文句だった。金を借りるときも、京子を家へ預けにきたときもそう言っていた。夏生の母親は、託児所じゃないんだから、とため息混じりに小言を呟いた。このとき京子はまだ、小学四年生だったように思う。夏生は中学生だった。受験を控えた大事な時期であった。京子はあの叔母の娘とは思えないほど、物静かで控えめな女だった。まだ十歳にして、人の顔色をうかがって生きている。

夏生の家は、父と母と夏生の三人で住んでいた。当然、部屋も両親と夏生の二部屋しかない。京子は両親と同じ部屋で寝起きしていたが、それも日が経つにつれ、別々になっていった。京子から申し出たのだという。それから彼女は、居間の隅に客用布団を敷いて寝るようになった。

叔母の少しは、約一年近く続いた。母は困り果てていた。父も苛立ちを隠さなくなった。叔母とは連絡がつかない。最初の一ヶ月を過ぎた辺りから、なんとなく夏生には、もう叔母は京子を迎えないだろうという確信があった。

京子のいる生活に慣れ始めてきた、ある日のことだった。学校から帰ったとき、京子は一人で本を読んでいた。足を放り出し、ランドセルを傍らに置き、壁にもたれている。彼女はいつも一人だった。家の中でも、外でも。京子が友達と一緒にいる場面を、夏生は一度も見かけたことがない。彼女は薄汚れた赤いランドセルを背負い、黙々と夏生の家へ帰る。

「それ、面白いのかよ」

夏生が声をかけると、京子はゆっくり顔を上げた。猫を思わせる、少しつり上がった目をしてる。

「わからない」

と京子は答えた。夏生は首を傾げ、彼女の本を横から覗き込んだ。小学生が読むには、やや難しいと思う内容だった。男女の三角関係を描いた小説の面白さは、確かに京子のような年齢には理解し難いだろう。

「もっとわかりやすく面白いのがあるだろ。絵本とか、そっちにしたらいいのに」

夏生が言うと、

「わからないからいいの」

と京子はさも当然かのように言い切った。その力強さに、夏生は思わず面食らう。京子の声は、

コロコロと鈴が転がるような高い音をしている。

「なんで」

「わからないと、わからないことで頭がいっぱいになるから。他のこと考えなくてよくなるの」

「意味わかんねえ」

また京子は顔を伏せ、文字を追いかける。そして突然、腕を伸ばして夏生の袖を引いた。

「なんだよ」

「この漢字は、なんて読むの」

夏生は膝を折り、京子の指さす方をじつと覗き込んだ。目を凝らしてみるのが、暗くてよく見えない。窓の外は薄い闇が広がりつつある。電気を付けなければ、と思い、立ち上がろうとした。

京子がそれを止める。

「おい、電気付けなきゃ見えないだろう」

「いや。見て。いま、ここで見てよ」

「わがまま言うなよ」

夏生は、このとき初めて、京子がああ叔母の娘であることを実感した。京子の目は、夕闇に融けきらない強い光が灯っていた。妖しく光るその目に、夏生はつい唾を飲んだ。たかが小学生だぞ、と自分に言い聞かせる。

京子は夏生を見上げ、ゆっくり照れたようにはにかんだ。薄い唇がめくれ、まだ乳歯の混じった白い歯がのぞく。

夏生は同級生の女子と、目の前の京子と比較した。京子の身体は痩せ細った子どもそのものであり、白いワンピースから伸びる足は棒のようだ。膝小僧が丸く出っ張っており、少し力サつきひび割れている。

京子は誰がどう見ても、子どもだった。

夏生は彼女の手を振りほどき、居間の電気を付けに歩いた。かち、かちと二、三度点滅する。ここ最近、電気の反応が悪い。そろそろ電球を変えなければ、と夏生は思う。今日にでも父に言う。

「電気、ついちゃった」

京子が言う。残念がるような色があつた。夏生は彼女が何を考えているのか、全くわからなかった。わからないことで頭がいっぱいになる。京子の言う通りだ。いま、夏生の頭の中は全てが京子でいっぱいだった。

夏生は振り返ることなく、黙って居間を出た。その足で自室へと駆け込む。扉を閉めると、ほとんど雪崩るように背中を預けた。目を閉じると、自然と京子が浮かんだ。スローモーションのように、彼女の微笑みが再生される。弧を描き、まるく笑う、ほんのりと色付いた唇。

目が覚める。いつの間にか寝ていたようだった。ソファで寝ていたせいか、身体がギシギシと

固く強ばっている。夏生はうん、と背伸びをし、湿気で暴れる毛先を指の腹で撫でつけた。外は依然として暗く澱んでいる。京子からの電話はまたこない。特に時間を決めているわけではないが、彼女は学校が終わると、いの一に夏生へ電話をかける。午後四時半。とつくに授業は終わっているだろう。

夏生はテレビの電源をつけ、しばらく何も考えず画面をぼうつと見ていた。多大な情報が夏生の脳へ入り、どこにも引つかかることなく抜けていく。この感覚が夏生は好きだった。無意味なものに溺れているとき、このときが一番現実を忘れられる。

夏生が第一志望としていた高校に合格した数日後、叔母が京子を迎えにやってきた。

その日は夏生の入学祝いに、出前でたくさんさんの寿司やピザをとっていた。母は自分のこのように喜び、父もどこか誇らしげな顔をしていた。夏生自身も、両親の期待に無事応えることができたことに、天まで飛んでいけそうな浮遊感に満たされていた。実際、驚くほどに身体が軽かったのだ。肩の荷がおりた、そんな言葉がピッタリ当てはまる。無邪気な期待は、重圧となつてのしかかっていたのだ。ふと夏生は、自分たち家族の輪から一步離れた場所にいる京子を見た。同じ食卓を囲んでいるのに、彼女だけがなんだか遠かった。京子は夏生の視線にすぐに気づき、薄く微笑んだ。このとき彼女は、小学五年生になっていた。子どもがするような表情ではなかった、と夏生はいまでも思う。正直に言って、気味が悪くて仕方なかった。京子の存在自体が不気味で、家のインターフォンが鳴ったのは、ようやく母の話が一段落着いた頃だった。息子の古報に気を良くした母は、意気揚々と玄関へ向かった。しかし帰ってくる頃には、まるで別人となつてい

た。興奮のあまり広がつていた瞳孔はひっそりとなりを潜め、代わりに目と眉がつり上がっている。その顔を見たとき、夏生の頭には叔母の顔がよぎった。叔母が家にいたとき、母はいつもあんな顔をしていたからだ。そしてそんな母の後にやってきたのは、七年前と何一つ変わらない姿をした叔母だった。

「ごめんね、きょーちゃん。ママ迎えに来るの遅くなっちゃった」

叔母が軽く手を合わせる。その目線を辿るように、夏生は京子に目を向けた。一年ぶりの再会であるにも関わらず、京子は顔色一つ変えない。あの年齢に合わない、やけに大人びた微笑み。母親の迎えに、喜んでいるのか、怒っているのか。何も読み取れない。そういうところが不気味なのだ。

母は、「とても良いタイミングで来たわね」と皮肉を言っていた。

京子は家を出るとき、ただ黙って頭を下げた。お世話になりました、とたどたどしい声と共に。父も母も、京子をどう扱っていいか決めあぐねていたが、決して彼女を嫌ってはいなかった。礼儀正しく、思慮深い。嫌う道理が見当たらない。

叔母はフルーツタルトを母に渡した。長い間預かってくれた京子のお礼だという。テーブルには、既に二つのケーキが並んでいた。

どうせなら食べていきなさい、と父がすすめた。三人でこの量はさすがに食べきれない、と思つたのだろう。しかし叔母はそれを断り、待つてるから、と表を指さした。叔母の新たな男は、分厚いサングラスをかけ、首には重そうな金のネックレスをさげていた。車から降りようともせず、

窓を開けて煙草の煙を空へと逃している。京子は自分の父となる男を、瞬きもせず、窓からずつと見つめていた。小さな指がレースのカーテンを軽く引つ掻いていた。

そそくさと帰ろうとする叔母を母が引き止める。

「京子ちゃん、ごめんね。ちよつとお母さんとお話するから、夏生の部屋に行つてもらえるかな」
京子は素直に頷き、夏生の袖を引いた。夏生は背筋がぞわつと粟立つのを無理やり抑え、彼女に触れないよう氣を使つて歩いた。

部屋の扉を閉めた途端、母が声を荒らげた。ような氣がした。

「ベッド、使つていいから」

京子は部屋をきよろきよろと見回し、不安な氣持ちを隠そうともしなかった。夏生はキャスターのついた椅子に座り、ベッドを顎でしゃくつた。

京子の髪の毛は、ここへ来たときよりも随分と伸びた。一年前は肩につかない長さだつたというのに、今は鎖骨を過ぎたセミロングだ。ストレートの髪を揺らし、京子は膝を抱え、そこに頭を埋めた。夏生は、なんと言えればいいかわからなかった。適切な言葉が見つからない。そう悩んでいるうちに、京子はボスつとベッドに横たわつた。

「夏生くんの匂いがする」

京子は枕に鼻を寄せ、小さな声で言つた。夏生の頬に熱がのぼる。

「うわつ、嗅ぐなよ、ばか」

「どうせなら、夏生くんと一緒に寝たらよかつた。一人で寝るの、本当は嫌だつたの。怖かつた

んだよ」

気づいたときには京子は夏生を「夏生くん」と呼ぶようになった。「夏生くん」は、当時夏生が付き合っていた同級生と同じ呼び方だ。皆が名字で呼ぶ中で、彼女だけが夏生と呼んでいた。はじめは叔母が、次に彼女が。それが今では、京子だけになった。

一度、彼女を家へ招待したことがある。共働きの両親のいない間に、少しの下心を添えて。

しかし二人きりではなかった。京子がいいたのだ。京子はいつものように、居間の隅っこで本を広げていた。真っ暗で電気もつけずに。

「夏生くんの妹？ 可愛いね」

彼女の声に、京子は人好きのする笑みを返した。夏生は驚いた。京子がそんなふうにあうことを今まで知らなかった。彼女はそれから、夏生ではなく、ずっと京子の相手ばかりしていた。また来るね、と言っていたが、その「また」は二度とこなかった。夏生が振られたのだ。日々、勉強に追われていた夏生は、彼女からの連絡もママに返さなくなっていた。夏生の真面目で優しいところが好きだと言っていた彼女は、それを理由にして別れを告げた。

「ママが迎えに来てくれて、本当に嬉しいの。いつか、絶対来るだろうなって思ってたし、ずっと待ってたから」

京子が寝そべったまま、目線だけをこちらに向けた。でもね、と言葉を続ける。

「わたし、もうちょつとだけ夏生くんの近くにいたかった」

夏生は、かあつと喉元が燃える錯覚を覚えた。目の奥が熱い。京子は潤んだ瞳で夏生を見た。

京子はまだ、小学生だ。

部屋の外から何かが割れる音がした。パリン、と歯切れのいいその音は、硝子か何かが壊れたものだろうか。女の金切り声がする。それは母のものか、叔母のものか判別がつかない。姉妹だからなのか、二人の声はよく似ている。カラスのような声をしているのだ。

部屋の外では暴力が渦巻いている。しかし夏生の内側にも、熱い暴力が目覚ましつつあった。それは今までに感じたことのなかった衝動だった。とめどない濁流のような、自分じや制御できない恐ろしいもの。

夏生は自分の意志とは関係なく、京子の元へと歩き出していった。京子の鋭いアーモンドアイに艶かしい色が浮かぶ。唇をきゅつと突きだし、ゆつくり弧を描いてまるくなる。京子にはにかなだ。まるで夏生が来ることを始めから知っていたような微笑みだった。

京子の膨れた頬に手を添える。柔らかく、ふにふにと弾力のある肌。京子は目を閉じた。長いまつ毛が期待に揺れる。夏生は腹に熱が落ちるのを、ぐつと堪えた。

京子の右目の下にある、泣きぼくろ。叔母の顔にもあるものだ。

またパリン、と壊れる音がした。それは夏生の身体の中から聞こえた気がした。

やりたいことは、我慢しなくてもいいのだ。あの夏の日、叔母の言葉がぼうつと蘇る。自分も流れに抗うことなく、泳いでみたいと思った。

夏生は内から湧き出る欲望のままに、震える指先で京子の唇を触った。

ついに外では雨が降り出した。夏生はインスタントコーヒーをカップに移し、キッチンから足の様子を観察した。この分だと、夜まで振り続けるだろう。

壁に立てかけた時計は、既に午後六時を指していた。今日はもしかしたら来ないのかもしれない、と思った刹那、尻ポケットに入れていた夏生のスマートフォンが震えた。画面を見る。カップをダイニングテーブルに置き、夏生はひとつ吐息をついた。

画面をタッチし、耳に押し当てる。

「遅かったな、なんかあったの」

「今日ね、委員会があつて。そろそろ文化祭が近いんだって。だから、そう、私、実行委員になったの。文化祭の。じゃんけんで負けちゃったから」

「文化祭？」

「今年は、えと、ほら、去年が体育祭だったから。だから、文化祭。来年はなんだっけ、忘れちゃった。また体育祭に戻るのかな」

京子は息を弾ませて話し出す。夏生は適当に相槌を打ちながら、こんな子だったかなと思う。小学生の頃の方が、彼女はもつと落ち着いていた。歳を重ねるにつれ、母親の影が色濃くなってきた。遠く離れていたはずの二人の女の姿が、次第に重なりあつていく。

夏生がまだ実家から大学へ通っていた頃、京子が高校生になったと、母が教えてくれた。叔母

が京子を迎えにやってきた日以来、この家では彼女の話はタブーとなっていた。京子、というよりも叔母の存在が。だから、母が彼女の名前を口にしたとき、夏生は顔には出さなかったが、内心ビクビクと怯えていた。母はまだ知らない。夏生は既に、高校生の京子と会っていた。

入学式が終わった帰りに、京子は夏生を呼び出した。場所は京子の家の近くにある公園だった。遊具が撤去され、ほとんど何もなくなった公園に立ち入る子どもはいない。

京子はスカートを翻しながら回り、夏生に新しい制服を見せつけた。夏生が通っていた学校よりも、数段上の進学校だった。白いプリーツスカートは、いつかのワンピースを思い起こさせた。相変わらず、彼女の足は棒のように細い。転んだだけで骨が折れてしまいそうだと、夏生は思った。

「夏生くん、夏生くん。どう、私、似合ってるかな」

珍しく京子ははしゃいでいた。長い髪の毛を耳にかけ、上目遣いに夏生を見る。午後五時半を知らせるチャイムが鳴る。夕焼け小焼けのメロディを背に、子どもの帰宅を促すナレーションが響く。夏生は改めて、京子の姿を上から舐めるように見つめた。かつて一人ぼっちでいた小学生は、どこへ行ってしまったのだろう。この頃から、夏生は京子の目が見られなくなっていた。

「可愛いよ」

京子が求めているであろう言葉を、夏生はすげなく言った。京子は目を細め、ゆるく笑った。愛想笑いだな、と夏生は彼女の嘘を見破った。きつと京子も夏生の本心を見透かしている。

「本当に？」

と聞いてくるので、

「マジで」

と言つて、彼女の唇に自身のそれを重ねた。キスが黙らせることに特化した、手っ取り早い有効な手段だと気づいたのは、ここ最近のことだった。

京子は恥ずかしがり、夏生の手を引いて公衆トイレへと誘った。夏生はさすがにまずいと思い、彼女を止めようとしたが、京子はくすぐすと楽しげに笑うだけで夏生の制止を全て無視した。誰もいないから、こんなとこに来ないよ、と根拠のない理由を述べて。

京子の言う通り、長らく使用されていないのだからことがわかる、湿気つて汚いトイレだった。床のタイルにはこびり付いたシミ。壁は所々剥がれかけ、むき出しのコンクリートが見えている。息を吸うのも嫌になる場所だ。夏生は若干潔癖のきらいがあつたために、一刻も早くここを出たかった。

唯一きれいと言えるのは、手洗い場の鏡だけだ。二枚並んだ鏡のひとつに、自分たちの姿が映る。夏生の焦げた茶髪は、生まれつきのものだ。陽に透かすと金に光り、京子はそこが好きだとよく口にした。

京子は、身内の鼻眉目を差し引いて見ても、可愛い顔をしていると思う。ツンと尖った鼻は小さく、下唇がぼつてりと厚い。色濃いまつ毛に縁取られた瞳は、まるで猫のようだった。

京子が夏生の首に腕を回した。ん、と踵を上げ、顔を近づける。夏生は彼女の細い腰を抱き、安定するよう支えた。甘いバナラの匂いが鼻腔をくすぐる。京子の唇はリップクリームでベタついていた。

夏生は薄く目を開けた。鏡には、夏生に抱きつく京子の後ろ姿が映っている。女らしいくびれのある身体。小ぶりなおしりが揺れる度、スカートのひだも動く。夏生は彼女の髪の毛をそつと撫で、指にまきつけた。ハリのある、艶やかな黒髪だ。

「煙草」

ハツとして、京子が言った。切れ長の目を見開き、夏生の唇に人差し指で触れた。

「煙草の味がする」

京子に会う前に、夏生はマールポロを吸っていた。大学生になり、付き合った彼女の影響で吸い始めたのだ。彼女は夏生よりひとつ歳上の女だった。料理人をめざし、専門学校に通っている。親に負担をかけさせたくなくて、自分で学費を稼いだ。さやかが本名だが、どうしてか頑なに「さやちゃん」と呼ばせる女だ。

彼女は夏生が勤める居酒屋の先輩だった。テキパキと仕事をこなし、終わったら誰よりも早く帰る。何事も素早く、効率よく行う人。だからこそ、夏生への告白も潔く分かりやすいものだった。一言、好きだと言われた。断る理由が、夏生には見当たらなかった。

好きかどうかは分からないが、嫌いではなかった。さやかの少し太めの眉毛や、一本一本立ち上がったまつ毛。気の強さを表した大きな口。それに加えて胸も大きい。学校の友人らに紹介したならば、きつと羨ましがられるだろう魅力的な女だった。

さやかのことを、京子に言ったことはない。言うつもりもなかった。

「嫌？」

誤魔化すように夏生は聞いた。

「いやじゃない」京子は首を振り、またも口を吸おうと踵を浮かす。「ママと同じ匂い」

叔母も同じ煙草を吸うのだな、と夏生は思い、すぐにどうでもいいことだと振り払った。

成人し、一人暮らしを始めてから、京子と会う頻度が格段に増えた。父は何も言わなかったが、母は最後まで反対していた。結局は通学のことを理由にし、夏生は自分のわがままを押し通した。母も口では否定を重ねていたが、どこかで息子の自立を認めつつあったのだろう。意外にも、そんなりと話は通った。

早く大人になりたかった。成人しただけで大人になれるとは思っていない。でも大人がどういうものか分からない。何をしたら大人になれるんだろう。

ただ、京子と会うと、まだ制服を着て化粧つ気もない彼女の姿に、ひどく安心するのだ。俺は子どもじゃないんだと、大人にもなっていないくせにそう思う。幸か不幸か、京子の通う学習塾の近くに夏生のアパートはあった。恐らく彼女は、木曜日も塾があるのだと親に言っている。隠し事が異様に上手い子なのだった。

京子が家へ来る頃には、もう雨は本降りとなっていた。彼女は頭から水を浴び、ブラウスは透けて中のキャミソールがまるまるわかる、散々な格好でいた。

夏生はバスタオルを引っさげ、上がり框で彼女の頭を拭いてやった。京子は大人しく拭かれていた。

「傘、借りて帰る？」

「いい。今日は泊まりたい。だめ？」

「明日学校は？」

「休みの。本当だよ」

京子はズル休みの癖があつたため、夏生は訝しむ目をやめなかった。

簡単にシャワーを浴び、夏生のスウェットを借りた京子は、我が物顔で部屋を歩き回り、ソファに足を広げて座る。夏生は傍へより、京子の細い足を丁寧に畳んだ。

「女の子やろ」

「今日の夏生くん、ママみたい」

「きみのお母さんはそんなこと言わんと思うけど」

京子はくすくす笑う。

「うん、言わない。ママは、いつも男の人のことばかりだから」

夏生はしまった、失言した、と思っていたが、京子は意にも介さなかった。

それからしばらく沈黙が広がった。夏生は背もたれに手をつき、腰を曲げ、京子の額に口づけをした。

京子はそれを受け、赤子のようにはしゃぐ。夏生の頭を引き寄せ、自身の胸に埋めようとする。

二人してソファに転がった。男の一人暮らしのソファは、あまり大きいとは言えない。狭いな、と夏生は思った。

「狭いね。けど、いいよね」

京子も同じことを言った。こういう瞬間、夏生の胸は暖かな気持ちで埋め尽くされる。何も言わなくとも、同じことを思っていたとわかったとき。

京子に会う前は、あんなにも陰鬱とした気持ちでいたのに、いざ顔を合わせると、彼女のことを好きだということはいっぱいになる。不安も後悔も全部雨に流されてしまう。

俺はこの子の子のことが好きで仕方ない、と思うと同時に、どこが好きなかわからなくて怖くなる。京子は夏生の髪の毛が好きだと言った。でも夏生は、彼女のどこに惹かれたのか、自分でも掴めないでいた。たとえば、目。京子の猫みたいにかいきな、ハチミツを煮詰めたような甘い茶色の瞳。美しいとは思う。好きなのは知れない。

京子が目を閉じた。キスをしてほしいときの合図だ。夏生はかぶりをふり、思考を放棄し、自分のやるべきことを優先した。重なる寸前、家のインターフォンが鳴る。

夏生はゆっくりと京子の身体の上から降り、京子はすぐに目を開かせた。甘い雰囲気が消えてなくなる。張り詰めた緊張感の中、夏生は恐る恐る扉を開けた。

「ごめん、近くまで来たから寄っちゃった。電話入れればよかったね」

そこにいたのはさやかだった。彼女は緩くパーマのかかった髪の毛をヘアクリップでまとめている。薄着のカーディガンをはおり、腕には雨粒のついたビニール傘をさげていた。

「誰か来てるの?」

「いや、あの」

夏生はうろたえた。どう説明すればいいのか。どうしたら疑われないですむのか。そんなことばかりを考えていた。

ワンルームのアパートだ。さやかが少しでも奥を覗けば、すぐに京子は見つかるだろう。夏生の部屋は、またそこまで物が多くない。遮蔽となるものがない。

さやかが不思議そうに首を捻る。いつまでもここににいるわけにはいかない。部屋に上げなければ。でも。

迷う夏生の後ろから、

「夏生くん?」

と京子が声をかけた。ひよこつと顔を出す。さやかは京子を見た。

「夏生、あの子は?」

「妹です。夏生くんの。高校二年、文化祭実行委員やってます」

京子が答えた。胸を張り、えっへんと威張り散らかす。

「え、夏生、妹いたんだ。知らなかった。言ってくればさ、なんか甘いお菓子とか買ってきたのに」

「いえ、わたしも雨宿りにここ来ただけなんで。雨、すごくなかったですか?」

夏生は脱帽した。京子の臨機応変ぶりには、舌を巻くものがある。

こんな日がくるかもしれない、とは思っていたが、まさか今日だとは考えていなかった。さやかはたまに、連絡なしに家へ来る。忘れていたと言うが、夏生に女の影がないかを探しているのだ。また縄張りを主張せんとばかりに、歯ブラシやクレンジング、化粧水を置きっぱなしにしている。京子が家へ来る日、夏生はそれらを毎回棚に片付けている。自分がいた痕跡を残す、犬みたいにマーキングをする女だ。

毎週木曜日に来る京子と、不定期に訪れるさやか。いつかは、こうなる日がきてもおかしくない。

夏生は洗面所へ行き、気づかれぬうちにさやかの物を元に戻した。

キッチンでは、さやかがホットミルクを作っていた。京子は彼女の手元を見ながら、けらけらと愉快な笑い声をあげる。

「ねえ夏生くん、さやちゃんと私、おんなじ高校なんだって」

「長谷川先生もまだいるんだってね。あの人、私が入る前からいるっぽいのに」

「敦子ちゃんね、いま一年生の担任してますよ。最近、ていうよりももう少し前かな。旦那さんと別れたんですって。浮気、だったけ。不倫？」

「嫌だね、そういう男の人。奥さんいるのに他の女に手を出すなんて、最低だよ」

さやかは顔を顰めた。京子は彼女のもとを離れ、ソファに座る夏生の隣へと腰掛けた。京子の膝が夏生の膝にぶつかる。同じ骨なのに、京子のは柔らかい。

「違いますよ。敦子ちゃんが、好きになっちゃったんです。まあ、噂ですけど」

カラカラとティースプーンを使ってさやかはミルクをかき混ぜる。その音に混じって、京子が

夏生の指を触った。さやかはホットミルクを一口飲み、首を傾げた。そして後ろの冷蔵庫に手を伸ばし、「夏生、前に買ってきたチヨコまだ残ってる？ 京子ちゃんも一緒に食べよっか」と言った。

さやかの目がなくなつた一瞬で、京子は夏生の唇に自身のそれを押し付けた。触れるだけのもので、すぐに離れていった。そしてまた、京子は何事もなかったかのように振る舞う。何も知らないです、という顔をして、わたしは頭が悪いから、というような腑抜けた声で。

「でもわたし、わかります。好きになつたら、しょうがないんですよ。どんなこととしても、その人の傍にいたくなっちゃう。さやちゃんもわかりますよね？ 女の子だもん。夏生くんはわからないだろうけど」

京子は挑発するような目で夏生を見上げた。さやかは曖昧に苦笑し、話を早々に切り上げ、チヨコレートの話を始めた。

「京子ちゃん、チヨコレート好き？ 食べれる？」

「食べられます、チヨコ。大好きです」

「わたし、チヨコどこにあるか知ってます。さやちゃんは休んでください」と京子は軽い足音を立てながら、さやかの元に戻る。入れ替わりに、さやかがやってきた。ホットミルクの入ったマグカップを両手に抱えていた。そのまま、先程まで京子が座っていた場所に腰を下ろすと、右手のカップを夏生に渡した。

「ごめん、ちよつと甘すぎたかも」

「ああ、うん、それは大丈夫。甘いのは、別に」

「京子ちゃんのも作ろうかと思ってたんだけど、あんまり甘いのはだめって言うから。でもチヨコは平気なんだね、不思議」

京子は甘い好きだよ、とは口が裂けても言えなかった。さやかの作ったホットミルクは甘すぎることもなく、じんわりと染みる温かさに満ちていた。

「夏生くんママに言うかもね。あの人」

さやかが帰った後で、京子はぼそりと呟いた。夏生のベッドに大の字で転がりながら。

「さやちゃん？」

「うん。さやかさん。わたしのこと全然信用してなかった。ずっと、夏生くんママがママのこ
と見るときとおんなじ目してた」

「なんだよそれ」

「夏生くんにはわかんないかな。だって夏生くん、人の目あんまり見ないもんね」

「見てるじゃん」

夏生は寝そべる京子の顔を覗き込んだ。前髪をかきわけ、彼女の広い額を暴く。眉が記憶よりも細くなっていた。

「こんな近かったら、なんにも見えてないくせに」

鼻先が触れる。京子の吐く息を、夏生は吸って生きていた。

「知らなかった、彼女いるって」

京子は傷ついた、と言わんばかりの顔をして言う。そこに昔の面影を夏生は見つけた。京子はいつもこうなのだ。こうなのだった。

彼女は雨が降っても傘をささない。たとえどれほど大粒の雨が降っていても、それは決して変わらない。京子は常に、物欲しそうにこちらを見る。それで堪らず、夏生は自分の傘を彼女に差し出すのだった。肩が濡れる。左肩だけがいつも濡れている。

終わりがもしないね、と囁いた声が空気中に溶けきる前に、夏生は京子の口を塞いだ。ぬくい人の熱が舌を伝わり、そこで夏生は気づいた。今日のホットミルクは少しお湯が多かったのだ。

母親からの電話を夏生はずっと取らずにいた。何度も鳴り響く着信音に耐えきれず、電源を落とした。火曜日。思っていたよりも大分早い幕切れだった。

いや、と思う。京子に手を伸ばした中学の頃を考えると、むしろ遅いといっている。

夏生は起き上がる気もせず、大学の講義をサボった。今日はたった一コマだけ、それも昼からのもの。それでも身体は動かなかった。寝返りを打ち、枕に顔を埋める。京子の匂いを探したが、

あるのは嗅ぎなれたシャンプーの匂いだった。そのまま夏生は眠りに落ちた。現実逃避の睡眠だった。

一体何時間が経ったのだろう。突然、部屋のチャイムが鳴る。夏生は反射的に肩を震わせた。昔から音に弱いのだ。もう大の大人であるが、未だに雷がこわい。京子はそんなところも可愛いと笑った。

母親か、さやかか。しかし夏生の予想とは異なり、扉の前に立っていたのは京子だった。

「京子、塾は……」

「休み……。もう、本当だってば」

彼女は学校帰りなのか、白い制服を身にまとっていた。きれいな通学鞆を後ろ手に持ち、夏生を見上げて困ったように笑う。

京子の父親が変わったのは、彼女が中学三年生にあがる春のことだった。奇しくもそれは、夏生が彼女と初めて会ったときと同じ歳だ。中学三年の春に、夏生は京子と出会った。

新しい父親は銀縁の細いフレームの眼鏡をかけた、いかにも真面目といった風貌な男だった。夏生は一度だけ、その父親が写った家族写真を見たことがある。京子の肩に手を添え、毅然とした顔でこちらを睨みつけていた。叔母の笑顔と相まって、それは微笑ましい写真だった。本当の家族みたいだ、と夏生は思った。

京子はその父親のすすめで、学習塾に通うようになった。塾の指導方法と彼女の学習意欲ががっちりと噛み合い、京子は見ると見るうちに成績を伸ばし、夏生の第一志望としていた高校より

もランクの高い学校へ入学した。漢字がわからないと、薄汚れたランドセルを背負っていたあの京子はもういない。

京子は成長するに連れ、多くのものを手に入れていった。いまの彼女に、わからないことなどあるのだろうか。

夏生の顔を見て、京子は一瞬目を見開き、そして踵を浮かして抱きしめた。扉が閉まる。夏生は鍵をかけ、その手で彼女の背中を撫でた。

「わたしね、夏生くんその顔好き。いまにも泣いちゃいそうなっていう、可哀想な顔」

京子はうつとりとした声音で言った。

「お前といると、俺、だめになる。なんなんだよ、お前。ほんと。もういいだろ。俺より賢くなつて、友達も増えて、もう大丈夫じゃなか。一人じゃなくなつたんだからさあ、もういいだろ」

「違うよ夏生くん。だめになるんじゃないくて、元々だめだったでしょ」

そこに責めるような色はなく、ただ慈しみに近い哀れみがあった。

多分、俺は、さやかみたいな女と結婚するのだろう。夏生はそうわかつていたし、母親がそれを望んでいることも知っていた。気が強く、テキパキと働き、自分を引っ張ってくれるような自立した女。間違つても京子のような女じゃない。

思えば機会は何度もあったのだ。京子家が家を出たとき、彼女の父親が変わつたとき、夏生が一人暮らしを始めたとき、さやかと付き合つたとき。そういう別れのタイミングを、夏生はみすみす見逃していた。見て見ぬふりを続け、今日まで京子を離せずにはいた。

きつと自分はこの子を離せない。漠然とした予感だけがあつた。夏生は京子を伴侶として選ぶことはないが、それと同時に手放す未来もありえない。

夏生は京子が望むものは、できる分だけ与えてきた。それでも人生まであげるつもりはなかった。それなのに、いま、夏生の全てを京子は奪おうとしている。木曜日にしか訪れなかった彼女が、火曜日にやってきたのはそのためだったのだ。

「俺、お前の何が、どこが好きかもわからないんだ。お前がなんで俺を好きかも。なんだよ、マジ。なんで今日来たんだよ、京子」

気づけば夏生は、彼女に捧げてばかりいた。そんな気がしてならない。実際は、夏生が彼女から奪ったものだつてたくさんある。それなのに、京子といると自分の全てを食い潰される予感が出てこわい。いつからだろう。いつからこうなつたんだろう。最初は、母親に捨てられ、どこにも居場所のない、自由とは程遠い女の子に、なんとなく手を差し伸べただけだった。ただの気まぐれに過ぎない。可哀想だなと思つたから。だから構つてやつた。

でもいまは。夏生は京子の顔に手を伸ばした。両手で彼女の小さな顔を、柔らかな頬を包み込む。京子は抵抗しなかつた。

猫みたいな瞳。長く艶のある髪。小ぶりで可愛らしい唇。

あ、と思つた。思うと同時に、声に出ていた。

「あ、俺、お前の……京子のほくろが、好き。右目の下の、泣きぼくろが」
叔母と、一緒の。

京子は嬉しそうに微笑むと、夏生の首に腕を回して抱きついた。「知ってるよ」

外は今日も雨が降っていた。いまは上がっているはずだが、それでも空気中には彼らの気配が色濃く残っている。雨の匂いがする。夏生は鼻を鳴らした。意図せず、泣いているみたいな声が出る。

「わたしね、ママの子どもでよかったなって、ずっと思ってるの」

京子が言う。昔みたいなの、コロコロと鈴が転がるような声だった。

詩
部
門

最優秀賞

而今^{にこん}

琴森

戀／53

奨励賞

南の島で悲劇のヒロインぶってみた

新北風（みーにし）

水槽

上原

陽子／57

森山

高史／61

藍原

知音／65



*

*

詩部門

最優秀賞

而今にこん

琴森

戀

神の宿る山は

息絶えた骸なきがらに集う銀蠅の群れ

彼方あちら此方こちらから硝煙が立ち上り燃える漆黒の骨

爆風に吹き飛び樹に垂れさがる骸

蛇の炎で燃え尽くす火炎放射器

神の宿る街は

十・十じゅうじゅう空襲で逃げ惑う人間の群れ

雨の様に投下される数多あまたの爆弾

照明弾に照らされ夜は蒼穹の様

弾を浴びた石獅子と崩れた石敢當いしじし いしがんと

神の宿る洞窟は

息を殺し芋の蔓を喰らう同胞の群れつる はらから

浅い眠りの中 やがて辺りは陽光に包まれる

天空を劈く米兵の拡声器つぎ

タバコモスワセテヤル！ メシモアル！

コロサナイカライツプンデモハヤクデロ！

最期は天色の透明な空の下で死にたい！
あまいろ

出たらアメリカーに殺されるぞ！

アメリカーヤ ノーサンドウ！

孤独の男が 禪を砂糖黍に括りつけひとり ぜんじ キビ

諸手を挙げ そろりそろりと出て行く

やがて ぽつりぽつりと男に続き

ぞろりぞろりと歩く人は蟻の様に列をなす

神の宿る浜辺は

深紅の浜に揺れる魚の群れ

異臭を放つ物言わぬ海蛇の軀

流れ着いた泡盛の欠片

漁師の書いた海豚漁の濡れた手帳

神の宿る岩礁は

崖から飛び降りる女学生の群れ

岬の突端を見上げると狂気じみた笑い声

ぼたりぼたりと岩礁散らばる彼岸花に似た骸

清廉な歌声が風に乗る

海行かば 水漬く屍

山行かば 草生す屍

大君の 辺にこそ死なめ

かへり見はせじ 長閑には死なじ

歌が止み 手榴弾の爆発音

耳を押さえ屈むと 息絶えた母親の伸びた掌

その指先には乳飲み子の干涸らびた骸

神の宿る森は

心中した戀人達の群れ

転生しても 必ず逢おうと固く抱擁して

鉄の暴風雨と言われた沖縄戦

弾痕に傷ついたヒンブンが 私に問いかける

お前は今を切に生きているか と

詩部門

奨励賞

南の島で悲劇のヒロインぶってみた

上原 陽子

沖縄県魅力度調査にて県民の九割が誇りをもっている島に住んでいます

クラスメイトの女子から

女が四年制大学に行ってどうするのと

何の底意もなく真顔で訊かれた

そんな私が住む島です

あんた一人のために放課後図書館を開けられない電気代がもつたと言いつける男性が高校の学校長をする島です
これは昭和の話です

役所の臨時職員の面接に落ちた私に
どうせ採用するなら別の若い女性にしようと思ったんだってとわざわざ耳に入れる
そんな女性が役人をする島です

女は大学に行く必要ない

女は家庭を守ればそれでいいのよと

聞こえよがしに喋って下さる

50代60代女性社員へ

新しい上司が女性だと知って

枕営業したのと違うと恐らく気のきいた冗談のつもりで笑顔で言うパート女性へ

時代遅れな考えではありませんかと

品がないですよとたしなめられなかった

弱すぎる私が住む島です

「女の敵は女」ではない

女同士だからってだけで仲良くは出来ない

女は一枚岩など幻想

女同士でも分かり合えないのは当たり前と

人気エッセイストが言う（＊）

そうかも知れない……と

目をしばたたかせる私が住む島です

これは平成の話です

いろんなことが喉につつかえて

えずきながら生きのびて

令和の世に形だけの嫁と姑からなじられたり

世の慶事法事その他もろもろ

私とは何の関係もない事が

ただただかなしく

誰も取りこぼさないなんて

いつか叶うつもりかしらと疑いながら

もつと生きたいと願う人に

私の命を分けても構わないと

悲劇のヒロインぶってみたかと思えば

サプリを毎日飲んで
健康診断を毎年きちんと受けている
お前どうしたいんだよと自嘲する
沖縄県魅力度調査にて県民の九割が
誇りをもっている
そんな島に住んでいる私です

(*) ジェーン・スー

詩部門

奨励賞

新北風（みーにし）

森山 高史

道行く人々が

速度を緩めて歩きたがる

ちよつと気取った昼下がりが

いつものストリートが

いつもとどこか違っている

この穏やかな秩序はなんだろう

新北風が吹いたのだ

長かった夏を終わらせたのだ

空気の不安が取り払われ

端から端まで見渡す限り

街は

北風に淡く染められた

空へ空へと見通す限り

島は

北風にやんわり包まれた

季節を変える気紛れな悪戯・

新北風が吹いたのだ

それに気づいた車椅子のご婦人も

気づくはずのない地域の英雄も

お喋りに疲れてきた高校生も

バスを待ちつづける老夫婦も

みんなみんなあつさりと

新北風に吹かれて美しいのだ

あれまあ屈託のない笑顔を

これみよがしに向けてくる

誰だつて敵うわけがない

誰も彼も新北風に支配されたのだ

だが

新北風の思い上がりも

一日かぎりとは知れている

あとはいつものように

疎まれるだけなのだ

ならばせめて

いまは素直に屈していよう

ご婦人も

英雄も

高校生も

老夫婦も

みんな素直に従っている

わたしも新北風に抗わない

そして

秘密だが

美しいわたしの姿を

硝子に映してみせるのだ

秘密の秘密だが

街の硝子という硝子のすべてに

美しいわたしの姿を

これ見よがしに映してみせるのだ

振り返る人はいなくても

新北風に支配されたわたしの姿を

まばたきせずに眺めていたい

新北風は

悪人風情を美しく包んでくれる

今日は

新北風が吹いたのだ

詩部門

奨励賞

水槽

藍原
知音

液晶でできた水槽

とめどなく注がれる

愚痴や愛や 侮辱や喜び

これが私の住まう世界なのかと

一喜一憂を共にしている

自らに閉じ込めた言葉は

口の中でよく香る飴になった

口を堅く閉ざして息を止める

私は蛙

いつしか人になる

曖昧な形のまま

水槽の奥底に閉じこもっている

歪み始めた水槽

気づかないふりをして信じ込んだ

飴の香りと共に溺れて

水槽の中を必死にもがいて

信じなければいけない

信じないと息ができない

緩やかにせり上がった水面下で

私は人になっっていた

感情や思考を馬鹿にする

気味の悪い鏡もどきの水槽の中で

飴と共に息苦しさを押し殺している

水槽を叩き割って

海に飛び出すことができない

何か一つだけでも信じたい

溢れかえった嘘やウソやホントウを
なりふり構わず味方につけて

まだこの世界にいさせてと

溺れながら懇願している

私は人

いつしかものがくことを諦めた人魚になる
有り余る無数の理想は

無関心に眺める天の川に流れている

この世界に植わっている私は

いつからか私になつていた

人魚の声に怯える日々の中で

何者かに握られた心臓と添い寝している

人魚になりきれない私

隔てのない水面から臨む世界は

私を人たらしめた

どこからか降る 幸せ自慢を愛している
それだけで

この世界の輝きを信じられる
飴の香りを塞ぎこむことはない
この世界の「正しい」は
私だけではわからないけれど
水槽の底から水面へと
液晶を叩き割って大海へと
がむしゃらに飛び出していく

短歌部門

最優秀賞

見送ってばかりだ

外田 さし／69

奨励賞

挽歌「押し色」―屋良朝春先生へ―
精霊の森
月の砂

おりぎ／70
宮城 里子／71
紺野 朔也／72



*

*

短歌部門

最優秀賞

見送ってばかりだ

外田 さし

サンエーのあさりでさえも息してたこと思いつつ外す呼吸器

君が見る景色を僕も見ているよ瞼の裏は眩しい闇だ

君といった喫煙所にてマルボロを（焼き滅ぼさむ天の火もがも）

誕生日記念日そして命日と増えて手帳で生きていく君

死なれては困る他人が増えていく止まない雨に閉じられぬ傘

短歌部門

奨励賞

挽歌「挿し色」――屋良朝春先生へ――

おりざ

弟子たちの色を愛しむ微笑みの挿し色めきて光るアトリエ

新緑や光と影のめくるめく神の絵の具に声を失ふ

鮮やかな絵の具つきたる指先がJ A Z Zのリズムをかすかにきざむ

安須森御嶽や虹を背負ひて立つ画家の瞳はるか天空を描く

花曇り置き去られたるパレットの群青色は乾きつつ待つ

短歌部門

奨励賞

精霊の森

宮城
里子

久方の光ほのさす森林浴風を引き連れ娘ら駆けぬけり

若きらの背を見るも樂しかり今日の続き明日あるごとく

見えかくる視界に消えし影を追うふと忘らるる恐怖の兆して

父の手をにぎり握りし山の奥あの戦場はここかも知れず

風に散る木の葉積りし地の湿り精霊の森は生命の還流

短歌部門

奨励賞

月の砂

紺野 朔也

月面へとどく梯子と信じてる互いの背骨をなぞって眠る

ひとつずつ細い鎖をつなぐようほどこいた甲こにうかぶ爪痕

くしゃみした犬の頭をかきなでて昨日さみしい理由わけも忘れる

すり抜けてゆくものだけが降り積もる砂漠目醒めるなんてできない

爪先のささくれ剥けばやわらかな蟬はとおくの浅海の翅

エッセイ部門

最優秀賞

月光色の布

森山 高史／73

奨励賞

わたしの弟
きおく

虹野 チロ／79
梧藤 千沙／82



*

*

エッセイ部門

最優秀賞

月光色の布

森山 高史

妻が独立して、沖縄の伝統織物である芭蕉布の工房を立ち上げた。

独立当初は、力を必要とする作業がいろいろある。借りた空き家を工房風に変えていく。機を運び入れ、ショーケースを置き、看板を掲げる。あちこちをリフォームしなければならぬ。そもそも、最初は大掃除からだ。建物の内部も、小さな庭も、体裁を整えるのに時間が掛かった。私も手伝うことになる。自分の仕事もあったので、時間をやり繰りして、出来る限りは手助けした。それらの作業は嫌ではなかったし、さほど苦でもなかった。当分の間、収入はないだろうが、妻の独立を喜んだ。ただ、私の立場は、あくまでも妻の仕事の手伝いという認識で、芭蕉布そのものに興味は薄かった。

十年ほど経ち、工房を広げ、製品の種類を増やすことになった。ちょうどそのタイミングで、

リタイアしたばかりの私は、時間が空いていた。手伝いではなく、積極的に芭蕉布づくりに係わることになる。いろんな場面で、職業欄を「無職」とするのが、体裁悪かったからだ。

経験も知識もないくせに、工房の名前が入った自分の名刺をパソコンでデザインした。私のまず最初の作業は、自分の名刺を印刷することだった。いずれ、営業やら物産展で必要になる。いずれという日は、明日になるかも知れないのだ。

糸芭蕉から採った繊維をほぐし、糸にし、布に仕上げる。撚ったり、染めたり、織ったりする工程は、熟練者のすることだ。不器用な私には、とても無理に思える。できたとしても、これが伝統織物でございまして、その製品を世間に出せるものではない。そこまで図々しくはない。

実は、芭蕉布づくりの全工程の中で、畑の作業がかなりの割合を占める。ほかの多くの織物は、出来上がっている糸からスタートする。芭蕉布は、原材料を育てるところから始まる。

布になる芭蕉の糸は、どこにも売っていない。自分で作るしかない。それには、糸芭蕉の木から繊維を採って、自らの手で糸にしていくなか。原料の栽培から係わるのが、芭蕉布の大きな特徴である。私の主な担当は、畑作業になる。糸から布になる工程で、私の出番はない。

畑の拡張から取りかかる。芭蕉布が着物になるまでの第一歩目は、糸芭蕉の苗を植えることからだ。いや、畑を耕すことからだ。

糸芭蕉の外見と大きさは、バナナの木と非常に似ている。バナナは和名では実芭蕉と呼ばれ、花芭蕉や糸芭蕉と区別する。当然、三つは同じ仲間だ。

葉の部分も含めれば、高さは四メートル以上にもなる。暑い季節に何回か、枯葉や余分な葉を落とす。その作業と並行して、伸びすぎて固くならないよう、糸芭蕉の先端を切り落とす。いい繊維を採るには、必要な作業だ。汗だくになる。

手入れを怠った芭蕉畑、あるいは手入れを始めたばかりの芭蕉畑の中はジャングル状態で、方向感覚を失う。作業をひと休みして畑を出たら、思っていた場所と九十度違っていたなんてことは、珍しくない。

しかし、手入れをしたあとでは、見通しもきいて、歩きやすい「森」になる。ザワワザワワというサトウキビ畑の歌があるが、糸芭蕉の畑でも、風が吹けば、ザワワザワワと揺れている。木漏れ日が差し、気持ちのいい風が通り抜ける瞬間は、大袈裟に言わせてもらえば、「至福」の数秒間だ。

新芽が出てから倒されるまで、三年から四年かかる。ようやく倒せるのは、寒い季節になつてからだ。

糸芭蕉の直径は二十センチ余り。鎌で刈り取る。慣れないと、鎌を一度や二度入れただけでは倒れない。外側の皮を数枚剥ぐと、白くつやのある「丸太」状態になる。何段かに積み重ねて並べると、綺麗な畑のオブジェになる。

そこからいくつかの作業を経て、繊維を採りだし、何日もかけて糸にしていく。布製品になるまでは、さらにいくつかの工程を必要とする。

一般に、芭蕉布は素朴で美しい布と紹介される。

テレビの俳句番組で、視聴者の投稿作『芭蕉布や月光の色放ちけり』という句が、特選一席に選ばれていた。埼玉県に住む女性の作品で、私もその句にいたく共感した。月光を浴びて布が光るというのではなく、芭蕉布自体が、月の光を放っているというのだ。素晴らしい表現をしている。ただし、生産者として、ありがたい思いだ。芭蕉布の涼やかな特徴をとらえてくださり、ほかの織物では、この表現は無理だったに違いない。

仕上がるまでの工程が多く、年間に織り上がる量は極めて少ない。そんな芭蕉布を気に入って、製品を支持してくださるお客様は、少なからず全国にいらつしやる。大切に使用していただいていることも承知している。この俳句の作者も、その中のおひとりだと信じている。

沖縄には、紅型という、南国の雰囲気をも堪能できそうな染め物がある。原色が多く使われ、非常に華やいている。一般には、こちらのほうが知られている。

一方、その対極に芭蕉布がある。沖縄の草木から採る天然の染料を用いるので、派手な色にはならない。染料なしの生成り製品も多い。自分たちは、そう思っていないが、地味な織物と言われることもある。

芭蕉布の大きな特徴は、布の感触である。私自身、芭蕉布製のカード入れやブックカバーを使っているが、特に手触りが気に入っている。自然の繊維から出来ているのが感触で分かる。心地よい。ただ、あのごっつい糸芭蕉の木は連想しづらい。私が育て、私が倒した糸芭蕉。そこから、繊細

な芭蕉布製品が生まれている。

先人たちの知恵と工夫が、伝統となって引き継がれてきた。自分たちは、試行錯誤することなく、完成までの工程を真つ直ぐに作業できる。新しい柄や、新しい小物製品に取り組むくらいが、自分たちの工夫になる。伝統の大きな枠から外れることはない。何百年間の先輩たちの努力を頂戴して、製品づくりを続けられる。

仕事内容だけ取り出せば、私の仕事は、農業かもしれない。畑作業が大半なのだから、そのとおりだ。しかし、私にも、布づくりに携わっている自覚がある。ちよつと自惚れて、自負と言つてもいい。

畑の糸芭蕉を抜きにして、美しい光沢の芭蕉布は生まれない。畑の手入れが悪ければ、繊維に影響が出る。それは糸にも影響し、布にも影響してくる。私が手抜きをすれば、美しくない布になってしまう。

月光の色を放つ美しい布。その工程の一部に私が携わっている。年々、どの作業も丁寧にできるようになった。肉体の老化をカバーできる程度に、素早く鎌を使えるようになった。布になる過程と思えば、疲労感など知れている。手伝いではなく、芭蕉布づくりの一員として係わっている。決して工芸家や作家ではないが、芭蕉布の生産者だとは、胸を張って言える。本気だ。

仕事を尋ねられたら、躊躇なく、芭蕉布づくりと言え。自分の手柄ではないのに、少し、誇

らしげになる。

最初は、職業欄に関する軽薄な見栄から始めていた。季節を繰り返すうち、私の意識が、良識ある世間の社会人に近づいていった。普通に、芭蕉布を生産する工房の一員になっている。そう思いたい。

最初に印刷した名刺は、ほぼ残っている。誰かに渡す機会など、ほとんどない。ただ、ようやくこれで、私の生活実態が、名刺の肩書きに追いついたようだ。

関係者の誰であつてもいい。関係者でなくてもいい。「芭蕉布」の文字が入った私の名刺を、さりげない振りで、渡したくてたまらない。そのひとつひとつが、私の「自覚」を増幅させていく要素になるに違いない。

そして、芭蕉布はどんな織物かと尋ねられたときは、「月光の色を放つ布です」と、自分が発した言葉のように答えて、胸を張りたいと思っている。

エッセイ部門

奨励賞

わたしの弟

虹野 千口

私には、三歳になる弟がいる。やんちゃでいたずら好きな、可愛い弟。最近イヤイヤ期に入つてわがままやだこねが増え、毎日母と共に奮闘している。そんなごく普通の日常を過ごしていたのだが、去年の秋、私は母から衝撃の事実を告げられたのである。その日、母がいつものように弟を保育園から迎え、母と弟と私の3人で夕食を食べていた時、母が「保育園の先生がね、もしかするとツバメちゃんは発達障害を持っているかもしれないんだって……。」と静かに言つたのだ。私は箸を持っている手を止め、視線を母の方へ向けた。一瞬パニックになり、頭の中が真っ白になった。いつも元気いっぱいに暴れまわっている弟が障害を持っているかもしれない。母から告げられた事実にはショックを受けたと同時に、以前から心に引かかっていたことがはつきりとわかつたような気がした。弟は、とてもよく喋る子だった。生後半年過ぎたあたりから、母が絵本を買い、寝る前に読み聞かせをしていたこともあったのか、言葉を覚えるのが早かった

「気がした。しかし、弟が二歳になる頃、言葉を発する際の弟の話し方がおかしい私は思い始めた。動物の絵本を読み聞かせしている時、」「犬はなんて鳴くの」と私が質問すると弟は「わんわん」と答えてくれる。それから私は「猫は、どうさんは」と質問した。大抵の人なら「にゃんにゃん」とか「ぱおーん」と動物の鳴き声を答えてくれると思うのだが、弟の場合、「ねこ」とか「どうさん」とか鳴き声ではなく、質問した言葉をそっくりそのまま言い返すのである。その時、私は質問の仕方が悪かったと思い、少し違和感を覚えつつあまり気にしなかった。実は、この言葉のやり取りで自閉症によく見られるものだ¹と知った。ネットで調べてみると自閉症にもいくつ種類があり、その中に言語コミュニケーションの障害という項目に、「言葉を一方的・字義通りに話す特徴があり会話²が成立しない」と記載されていた。驚いたことに、私があの時、弟との言葉のやり取りで自閉症の症状が一致していたのだ³。他にも、こだわりが強く、同じものに固執するとか、気持ちの切り替えが苦手なことなど、どの症状も弟に当てはまっていたのだ。自閉症の症状以外にも、弟はADHD（注意欠陥多動性障害）の症状にも当てはまった。ADHDとは、活動に集中できず、気が散りやすいなどの不注意型と、じっとしてられない、待つことが苦手な多動性・衝動性型に分かれている。その中でも弟は多動性・衝動性型に入っている。とにかく落ち着きがなく、食事の途中で椅子から降りておもちゃで遊び始めたり、欲しいものが手に入らなかつたりすると、癇癢をおこし、自分のルーティンが崩れると泣き叫び我慢ができないのである。それ以外にも様々な発達障害と似た症状を弟は持っているが、まだ幼いのでこれから徐々に症状が良くなっていく可能性もあるとみて現時点では発達障害と断定することはできない。あくまで「疑い」

があるだけ、と母は話してくれた。あんなにたくさんの行動を弟は接していたのに、真実から目を背け、弟が発達障害と信じたくない気持ちで私はとても後悔した。そして、もし弟が発達障害で小学校に入學したら、クラスの子からいじめられたり、周りとのレベルに追いつけなくて弟が傷ついてしまわないか、と不安になった。すると、私が考えていることを悟ったのか、母は「実は、チロもちょうど、ツバメちゃんと同じくらいの歳の頃、保育園の先生に発達障害の疑いがあるって言われた事があつたんだよ。」と私に打ち明けたのだ。当時の私は滅多に喋らなかつたらしく、そんな私を先生達は心配したのかもしれないと母は言った。だが元々人見知りで引つ込み思案な性格でもあつたため、何度も園の先生達に診断を勧められたが、祖母が頑なに断り続けていたそう。それから私は、くもんやそろばんなどの学習塾に通わされたり、夏休みの課題で出された読書感想文は毎年母が手伝ってくれた。あの時の私は、ちゃんと勉強はしてるのに流石に過保護すぎないかと思っていたが、きつと祖母と母は私の可能性を広げるためにしてくれたんだと母の話聞いて思った。そんな私も今年で高校三年生。発達障害を疑われていたという事実を知らずに十八年間経った今は正直なところ、私は今でも説明が下手なところや、文章を上手くまとめることができない。だが身振り手振りで説明をしたり、いろんな人にアドバイスをもらいながら文章をまとめたりして何とか乗り越えていた。もし、あの時、祖母が受診を断らなかつたら、今の自分はどうなっていただろう。今思えば、私は周りの人や環境に恵まれているんだと実感した。弟にも私と同じような経験をさせて少しでも可能性を広げて、人生を歩んで欲しいと思う。

エッセイ部門

奨励賞

きおく

梧藤 千沙

皆さんは、自分の記憶が無くなるかもしれない、消えるかもしれないと考えた事がありますか。記憶喪失とは映画や漫画の中の話だと思っていませんか。私が十六歳で初めて経験した恐ろしくて、悲しい体験をこれから書こうと思います。

初めに、人間は毎日、記憶が保存されています。毎日、毎時間、毎分、毎秒、脳は色々な時を保存しています。楽しかった事、悲しかった事、悔しかった事など本当に全てです。もちろん、忘れる事も沢山あります。忘れた事は、自分が思い出す努力をしようと思ひ、思い出す努力をするまで、その記憶は思い出せないと思います。では、思い出す努力をしても思いだせない事はあると思いますか。思いだす努力というものは、他人と記憶の確認をし合ったり、自分が過去にやったもの、記録などを見たり、聞いたりすることです。だいたいの記憶はそれで思い出せます。思い出せない悔しさや悲しさ全てを体験したのは、十六歳の冬でした。

高校一年生の冬、詳細はふせますが、突然私の一部の記憶が思い出せなくなりました。その日の四日前から、眠れない日が増えていました。四日の合計睡眠時間はわずか八時間でした。記憶が思い出せないと知った日の前夜、同じく眠れませんでした。その夜は、午前二時になっても眠れず、私は毎日日記を書いているのでそ日記を読み返していました。すると、去年の十一月の体育祭の写真を見ていた時、それが夢だったという感覚になり、言葉では表わせられない気持ちになりました。その時は、寝不足だから変なんだろうと思い、寝ました。次の日、親しい友人にこの話を話してみました。私の友達は、私が最近様子が変な事を知っていたので、すぐに信じてくれました。去年の十一月の体育祭、私は結構な役割をもらい、忘れたくても忘れられないくらいの日でした。私は友達に体育祭の日の事を詳しく教えてもらいました。私の役割、何をしたか、本当に全部教えてもらいました。それを聞いてもなお、何も思い出す事はできませんでした。そんな体験は初めてだったので、気にしないというより気にしたくないと思いました。その日は、別にそんなに大きな事にはしませんでした。その翌日、去年の十一月のまた別の日、恋人との初デートの記憶が思い出せなくなりました。映画もみたのに、名前も内容も全て忘れてしまいました。流石におかしいと思った私は、お母さんに相談してみました。お母さんは、最初はそこまで大事にはしませんでした。いずれ思い出すかなあと私も思い、その日も普段通りに寝ました。その次の日、私は朝普通に起き、ボーッとしていました。感じたのです。心に何か足りないと感じたのです。私はすぐに日記をひらき、記憶を確認しました。去年の十二月、そう一カ月前の事を忘れてしまったのです。そしてメッセージアプリで友達に連絡しようと思った時、一人知らない

子が私の連絡先に登録されていました。そうです。その子は私の友達で私が忘れてしまっていたのです。私はその日確信しました。一日、一日記憶が何かしらなくなっていくているのです。お母さんに泣きながら伝え、すぐに脳神経外科に行きました。そこで、医者から脳に異常はないが、記憶の部分でおかしい事が起きていると言われ、精神科を勧められました。精神科は一カ月後にしか予約がとれず、不安でいっぱいでした。寝たらまた誰かを忘れてしまう、大切な思い出を忘れてしまうと思ひ寝られなくなりました。写真や自分の日記を見ても何も思い出せなくて不安で不安でいっぱいでした。友達や恋人は、

「もう一度思い出をつくれば良いよ」

と言ってくれました。その時期私は大きなストレスを抱えていて、記憶の事もあったので、気持ちがとても病んでいました。自ら命を絶とうかも考えていました。それでも、周りの友達がとても優しく、ずっと味方でいてくれました。感謝しています。精神科に受診し、診断名まで下されました。大きなストレスからなる記憶障害でした。しまいには、家族の事も忘れてしまうかもしれないと言われました。治す方法は一つ、ストレスの原因から離れることでした。その日から、色々な人を忘れていき、親しい友達も忘れていきました。思い出すことができたのも二カ月後でした。今でも、その時の事を思い出すと涙が出ます。思い出を忘れてしまう悲しさ、これ以上忘れたくないという悔しさ、友達と思う人達が、友達ではなくなる、という虚しさ。とても悲しいことでした。それでも生きようと思えたのは、本当に周りの人のおかげでした。まだみんな高校一年生であり、記憶障害を受け入れるのは簡単なことではないはずなのに、本当に優しくしてくれまし

た。今、私が生きている理由です。

この経験は、辛くて悲しい体験でしたが、学べた事が三つあります。

一つ、ストレスは絶対にためてはいけないということです。自分の体は自分が一番知っています。無理することは、自分が思っている以上に体にダメージがきます。

二つ、周りの友達が助けをも求めているなら、全力で助けることです。人間は必ず助けが必要な時があります。その時、手をさしだせる人間になること。

三つ、どれだけ苦しい状況でも、希望を捨てないことです。これは私が身をもって体験しました。どれだけ苦しく、もう生きたくない、と思っても明けない夜はないです。どうか希望をもつて生き続けてほしいです。休んでもいい、泣いてもいい、生きているだけで必ず楽になれる日がきます。生きていけば良いのです。

これが、私が学んだ三つの事です。これから、きっと辛い事があると思いますが、希望を持ち続けて生きていきたいと思います。

俳句部門

最優秀賞

初七日

元澤 一樹／87

奨励賞

戦争と〇和

外田 さし／88

そつと歌

知名 凜音／89

沖繩の姿 夏から秋

ルディセル 泰子／90

夏

佐藤りいら／91

*

*

俳句部門

最優秀賞

初七日

元澤
一樹

恋人の喪服のチャック上げて初夏

風死すや平和通りはどこですか

「お義母さん」と呼べば満ちゆく潮干潟

会いたい、と打っては消して夏の海

夕立や58号線^{ゴ1パチ}今日も工事中

俳句部門

奨励賞

戦争と〇和

外田 さし

鳳仙花 ネイルを褒めてくれる祖母

曾祖父に似て帰省せずサイパンへ

ポケベルも軍人も死語ゆうな落つ

ハッシユタグつけて祈れば基地に喜雨

ラムネ瓶投げてきたも来る令和かな

俳句部門

奨励賞

そつと歌

知名
凜音

抱きしめてシヨールを終しまふ昼下が

坂道でそつと歌いて冬ぬくし

寒暁やうどんの仕込み黙々と

浮うきねど寝鳥疲れたるとき胃のうごく

温め酒深みてきたる夜空あり

俳句部門

奨励賞

沖繩の姿 夏から秋

ルディセル泰子

明滅は演習機なり五月闇

南風うけて琉球に古る水の神

片陰のとぎれとぎれて島の道

太鼓打ついのちの力夏の月

赤蜻蛉無量なりけり摩文仁丘

俳句部門

奨励賞

夏

佐藤りいら

明け方の寝ぼけ眼に開く遠雷

夏風にはためくシャツの皺のあと

手のひらの小さな傷に夏蜜柑

炎天上歩く首から伝う汗

カーテンの隙間から覗く夏の空

琉歌部門

最優秀賞

〔方言〕
島言葉と季節

宮城
盛吉／93

奨励賞

宮城
里子／94
謝花
建松／95
前原
武光／96



*

*

琉歌部門

最優秀賞

「方言」

鳥言葉と季節

宮城
盛吉

肌^{はだ}に涼^{しだし}すだと
夜^ゆ夜^ゆの風^{ぬかじ}添^すへば

島^{しま}渡^{わた}て行き^いちゆる
鳥^とも聴^{いん}て

琉歌部門

奨励賞

蒲葵ぬ葉ぬ芳さ^{くば ふあ かば}

涼風ぬあまさ^{しだかじ}

母が手作いぬ^{ふあかあ ていじゆく}

愛し蒲葵扇^{かな おーじ}

宮城
里子

琉歌部門

奨励賞

霧^{ちり}晴^はりてい東^{あがり} 太陽^{てい}拝^{いだう}でい世^し間^きぬ

灘^{なだ}やしき有^ありとう 思^うゐ込^くみてい

謝花
建松

琉歌部門

奨励賞

思^うひ焦^くがれゆる

此^くの身^み知^しちをゆら

恋^く路^い飛^とび交^かゆる

闇^やみの蛸^み

前原
武光

最優秀賞受賞者コメント

小説部門
詩部門
琉歌部門

宮森
琴森
宮城

日向
戀
盛吉
／97
／99
101

*

*

小説部門

最優秀賞 受賞者コメント

宮森 日向

県外出身の学生との交流が増えると、「外から見た沖縄」の視点に多く触れることになります。それは気楽な南国だったり、「色々な文化や歴史的背景を持つ興味深い島」だったりします。たしかに、ここは中国等からの影響を受けたかつての琉球であり、戦後統治によりアメリカ文化も深く根付く場所であり、言わずもがな現代日本に包含されています。多様性という点では他のどの地域にも負けないでしょう。

しかし、これを面白いと思えるのは外にいる人々と、当事者の中では一部の強い人だけです。私を含む大抵の人は、そこまで強くありません。これは人類普遍に言えることですが、個人というのは非常に脆く不安定な存在です。だからこそアイデンティティの基礎を民族や言語、国などの「外枠」に依存します。そして沖縄という外枠は、前述の興味深い背景により、率直に言って軟弱地盤です。そのため県民は「沖縄」について考え始めると、自分は一体何者なのだろうと悩

まされることになります。悩みを自覚せずとも、その裏返しとしてのコンプレックスが無意識下に根を張ります。その上にのしかかるようにして、東アジア全体をめぐる様々な社会問題が——世の中とは往々にして傷ついた小さな車に多くの荷物を押しつける場所のようで——この小さな島に山積しています。こんな所はいやだと思う日は決して少なくありません。その気持ちは、こんな自分はいやだという気持ちと少し似ています。

本作にはそのような思いの丈をそのままの形で——若く不格好であることを自覚しつつ——思い切ってぶつけました。結論らしい結論はありませんが、国や民族、言語といったものを超える何か普遍的な「正しさ」が、北極星のようにどこかで必ず光っているはずで、それが見えるようになるまで、私たちは雨を忍び進み続けるしかありません。

詩部門

最優秀賞 受賞者コメント

受賞に際して

琴森 戀

この度は、第三回名桜文学賞「詩部門」の最優秀賞に、拙作『而今^{にこん}』をお選びいただき、誠にありがとうございました。受賞について、嬉しい反面、作品として描き切れていない沢山の想いが去来して、素直に喜びたい想いと反省とで複雑な心境です。

而今という言葉は、曹洞宗道元禪師の唱えた禪語です。刻々と過ぎ去る一瞬一瞬を而今（今、此所）に生きる事の大切さを説いています。

私は現在、沖縄戦の激戦地跡に住まわせて頂いております。目を配ると、屏風や石獅子に弾痕が残り、火炎放射器で焼かれた鍾乳石は墨色の儘で、戦世の惨さを声高に叫ぶ様に思えるのです。又、県内の学徒隊跡地である、ひめゆりの塔や白梅の塔、鉄血勤皇隊の碑、対馬丸記念館、アブリラガマ等の洞窟にも十数年前から赴き、志半ばで非業の死を遂げ、逝かれた御霊に祈りを捧げて参りましたが、或る種の無力さを常に感受して居りました。が、先日ひめゆり平和祈念資料

館を来訪し、生存された学徒の方が、意を決し、二十七年ぶりに自決の場に行かれた際、鎮魂の碑が塵屑で荒れている事を知り、頭が真つ白になったと拝聴しました。更に、未だ消息不明の方々が沢山おられ、今も苔生す草叢の何処かで遺骨が埋もれている現状を考慮すると、改めて沖縄戦を風化させてはいけないと心に誓い、今後も沖縄戦を題材にした鎮魂や平和を希求する詩作に励む所存です。

萌黄色に染まる樹々を抜け、初東風吹く岬の突端で、白菊を手向け、御霊に「この賞は私だけの賞ではなく皆様のお陰で賜りました。どうか心安らかに眠り下さい」と報告させて頂きました。選者の先生方及び名桜文学賞関係者の皆様方に深謝致しますと共に、厚くお礼申し上げます。最後に、私淑しております宮沢賢治の「農民芸術概論綱要」にある一文を記しまして、受賞の言葉とさせて頂きます。

〈世界が ぜんたい幸福にならないうちは 個人の幸福はあり得ない〉

二〇二三年 孟春

琉歌部門

最優秀賞 受賞者コメント

宮城 盛吉

此度、初めて第三回名桜文学賞の琉歌部門に応募したところ名誉ある最優秀賞に選考させて頂き有難うございました。

大変感激し喜びに堪えません。

この作品は例年秋にかけて越冬の為奄美大島から沖縄（琉球列島）の島々を介して南方の島々に渡っていく渡り鳥の群れ飛ぶ姿を見て詠んだ作品です。

毎年この季節（秋）になるといろんな野鳥の姿を見かけますがこの群れの中から何羽の鳥が越冬の鳥が越冬地に辿り着くのか？無事を祈らずにはおられません。

また鷺や差羽等が餌を啄んで羽を休めている所を見ていると御疲れ様と労いの気持ちで胸がいつぱいになりそつと眺めていました。

野鳥が餌を啄み休息出来る自然環境を何時迄も残し保全していかなくてはと熟熟感じました。

沖縄の文化で有る「琉球語」である方言を学校では使わない様と中学の頃迄標準語標準語励行の指導を受けてきました。それは本土に就職した時に言葉に困らない様にとの指導だったのでしょう。

集団就職で本土に渡った時、言葉の弊害もなく本来に良かったと思いました。

でも沖縄の文化である方言を今の若い人達は沖縄返還を境に島言葉を使って話せる人が少なくなり此の儘では死語になるのではないかと危惧しています。

私が嗜んでいる琉歌を通して方言を残して行けたら幸いです。

選 評

小嶋 洋輔

小説部門 エッセイ部門／103

玉代勢 章

小説部門／110

あずさゆみ

小説部門／114

西原 裕美

詩部門／117

吉川 安一

詩 短歌部門 エッセイ部門／120

屋良健一郎

短歌部門／123

小番 達

エッセイ部門／128

おおしろ 建

俳句部門／130

波照間 永吉

琉歌部門／135

照屋 理

琉歌部門／137

*

*

第三回名桜文学賞選考経過及び選評

【小説部門】

今の「沖縄」を描くこと

小嶋 洋輔

第三回名桜文学賞は、応募期間を二〇二二年九月五日から十月二十八日までと設定、結果一四編の小説作品が寄せられた。その小説作品を、選考委員三名で審査し、最優秀賞一編、奨励賞一編とした。選考の経過は以下の通りである。

選考委員…あずさゆみ（作家）、玉代勢章（作家・文芸評論家）、小嶋洋輔（名桜大学教授）

・一四編の小説を選考委員各自で読み、首席、第二席（場合によっては第三席）を選出
・一二月一二日（月）に沖縄産業支援センターで、選考委員会を開催し、それぞれ講評を行った。そして審議の結果、最優秀賞一編、奨励賞一編、とした。

まずは昨年と同数の応募作に安心した。だが、読み進めるうちに昨年の応募作と同様、完成稿とは思われないミスを多く見つけることになり不安になった。だが、(私の読んだ順がたまたまそうだったのだが)最後に畳みかけるように良作と出会うことができた。

そのうちの二作が、今回最優秀賞と奨励賞となった。最優秀賞の宮森日向「都市のメタファー」、そして奨励賞の島根たろう「雨に沈む」である。選考後に明らかにされた応募者のプロフィールによると、若い書き手のようであり(本選評執筆時に宮森日向が琉球大学びりお文学賞も受賞していることを知った)、今後も小説を書き継いでほしい才能に出会えたことを素直に喜びたい。

まず、最優秀賞となった「都市のメタファー」であるが、学生である「僕」(ヒナタ)の帰沖が描かれるが、その舞台は羽田空港に向う際に渋滞に巻き込まれたタクシীর車中のみである。この「僕」の帰沖は祖父の死を受けての急遽なものであるが、その日は二〇二二年の五月一日とされる。

この作品が高い評価を得たのは、羽田空港へ向うタクシীর車中のみを舞台として切り取り、その限定された空間のなかに様々な問題を取り込みつつ描いたことにある。登場人物も「僕」とタクシール運転手、そして電話の相手、別れた恋人美咲のみである。二〇歳の「僕」の「意識の流れ」に、二〇二二年現在の「沖縄」の問題が無理なく自然に映し出されてゆく。とくに上手かったのは、渋滞の原因となった事故の場面といえる。大型トラックに追突された「軽自動車」と「レクサス」の事故であるが、「潰された」「軽自動車」に対して、「無傷」の「レクサス」。ここに読者はどのような「メタファー」を見るのだろうか。

また、巻末、亡くなった祖父の体験として「僕」がタクシー運転手に語る「沖縄戦」と「コザ暴動」の風景は、唐突すぎるという選考委員の意見もあった（これは作中「僕」自身も語っている）。だが、先の交通事故からの「暴力」の連想は自然であり、新たな「沖縄戦」そして「戦後」の描き方を模索した結果ともとれる。私は積極的に評価したいと思う。

ここからは、若いこれからの書き手だからこそ贈る助言となる。まず小説の顔ともいえるタイトルが凡庸である。「僕」の「意識の流れ」のなかで様々な「記号」を示し、それを読者に解釈させる今作を過剰に説明するようなこのタイトルは、タイトルとしていかなものかと思う。冒頭の「東京タワー」を「男性器」の「メタファー」と感じる「僕」を描く場面も、使い古された「メタファー」の再利用であり、「記号」を読み解いてもらうその導入にしたかったのかも知れないが、別のものに見立ててほしかった。もう少し読者を信頼してもよいかも知れない。

また細かな点でいくつか気になった。ここでは一点指摘しておきたい。なぜ「筑波大学」の学生が、タクシーを用いて羽田に向うのだろう。日中が舞台の小説であり、「僕」は「朝から移動続き」という。であればさらに常識的に考えてありえないシチュエーションであり、その理由が気になり、「記号」の読みときを楽しみきれなかった。作中用いる固有名詞も「記号」である。「記号」を読み解かせる小説ならば、こうした点には注意を払ってもらいたかった。理由を書いておくことが必要な状況に「僕」はあるので、その理由がほしかったということである。

だが、最優秀賞に相応しい作品であることは間違いないと思う。今後の活躍に期待したい。次に奨励賞の「雨に沈む」である。

叔母と従妹、その「奔放な」二人に翻弄される主人公を描いた小説である。だが、ラブコメ的な小説ではなく、作品の雰囲気は暗く、淫靡である。とくに主人公夏生の視点を通して、不可解な他者として間接的にしか描かれない叔母は不気味であり、夏生はその雰囲気から「性的」な何かを無意識的に受け取っているのだが、その描き方が上手いと感じた。

だから、従妹の京子の描き方に物足りなさを感じた。思い切って夏生と京子の性的な場面を直接的に描けばよかったのかも知れない。そうすると、性的な場面のみで浮き上がる京子の淫靡で蠱惑的な何かを描くことができただろう。それは、「現実」であるので、夏生の「空想」のなかで膨れあがっているだろう淫靡で蠱惑的な叔母とさらに対照的に描くことができたかも知れない。とここまで書いて、本賞が大学が主催の文学賞であることを思いだした。書き手にそうした部分への配慮があったとすれば、当然の配慮ではあるが、少し残念にも思う。

また無い物ねだりであるがこの設定に、いわゆる「沖縄的」な何かがもつとからむとよかったかもしれない。こうした小説にこそ、作品世界を固める固有名詞が必要のように思う。

最後に、素晴らしい最優秀賞作品を選出できたことを素直に喜びたい。

(こじま ようすけ／名城大学国際学群 教授)

【エッセイ部門】

選 評

小嶋 洋輔

第三回名桜文学賞（エッセイ部門）は、応募期間を二〇二二年九月五日から十月二八日までと設定、結果一四編のエッセイが寄せられた。その作品を、選考委員三名で審査し、最優秀賞一編、奨励賞二編とした。選考の経過は以下の通りである。

選考委員・吉川安一（名桜大学名誉教授、詩人）、小嶋洋輔（名桜大学教授）、小番達（名桜大学教授）
・一四編のエッセイを選考委員各自で読み、首席、第二席（場合によっては第三席）を選出
・二月一九日（月）に名桜大学附属図書館会議室で、選考委員会を開催し、それぞれ講評を行った。そして審議の結果、最優秀賞一編、奨励賞二編、とした。

今回のエッセイ部門の応募作一四編を読んだ結果、最優秀賞となった森山高史の「月光色の布」が、あたま一つ二つ抜き出ている印象だった。虹野チロ「わたしの弟」と梧藤千沙「きおく」は、内容から高校生の筆と思われるが、体験を客観的に書くという意識はしっかりあり文章力もある、ということでもまさしく奨励賞となった。

最優秀賞となった森山高史「月光色の布」である。妻が立ち上げた、芭蕉布の工房を手伝う「リ

タイアしたばかりの私」の日常が、小気味のよい文体で語られる。秀逸だったのは、芭蕉布畑の風景描写である。選考後運営から示された応募者のリストで、この作者は、前回の本文学賞で奨励賞を受賞した方ということがわかった。その選評に私が書いたのは、感情とともに風景もじっくり書いてもらいたいということであった。その修正も含めてみごとに完成度を上げた好エッセイである。テレビの俳句番組に送られた「視聴者の投稿作」、「芭蕉布や月光の色放ちけり」の引用も効果的だったと思う。作者の解釈も面白い。だがエッセイであるので、この番組名はしっかりと記した方がよいかと思う。

奨励賞の虹野チロ「わたしの弟」は、三歳の弟に発達障がいのあると聞かされた私の思いが「素直」に描出されている。病名によるレッテルはりのようなものへの違和感が、そうとは意識されていないのだが無意識的に上手く描かれていると思う。本文中に「私は今でも説明が下手」、「文章を上手くまとめることができない」とあるが、そんなことはないと思う。ただ、いわゆる作文のルール、意味ごとに段落は分けるなどの知識をこれから身につけてほしい。

もう一つの奨励賞の梧藤千沙「きおく」は、自身の記憶障害の体験を語ったものである。その経験をただ振り返るのではなく、いわゆる「記憶」というものの本質に迫るようなことが無意識的にできていると思う。その上で、この体験から学んだことを、現段階でのまとめとしてしっかりと書くこともできている。作者にはこの体験について二〇歳になった時、三〇歳になった時など、今後も振り返って文章にしてもらいたい。そうすれば二〇二二年の「私」の「得たもの」がさらに深化してゆくと思う。

エッセイ部門を創設して、四回目になる。段々と本文学賞が求めるエッセイのかたちが、選考委員側でも応募者の側でもできつつあるように思う。

（こじま ようすけ／名桜大学国際学群 教授）

【小説部門】

込み上げてくる怒り

玉代勢 章

☆最優秀賞 「都市のメタファー」 宮森日向ひなた

不適切な題名、東京タワー、主人公の大学、車内喫煙、出発時間の設定など欠点はある。しかし欠点をはるかに超える美点がある。

美点一 作者は沖縄人を抑圧してきた暴力に対して小説＝虚構という禁欲的な手法を通して抗議している。作者には沖縄の怒りを書きたいという切実な思いがある。作者の込み上げてくる怒りに私は共感する。

美点二 羽田空港に向かうタクシーの中という空間と短い時間枠に青春の男女のもつれや祖父の人生や病的に肥大増殖した都市を嵌め込んで小説をまとめた力量は非凡である。

☆奨励賞 「雨に沈む」 島根たろう

男女の三角関係のもつれを描いている。力のある書き手だ。人物造形も話の展開も場面の描写もじょうずだ。最終章まで読者を引きつけて放さない。しかし作品が薄くて軽い。欲望や執着や嫉妬や憎悪の深い所まで降りて行って地下でうごめくものを示す必要がある。

☆「ペリー来航」

一八五三年を描いても現代人に示唆を与える視点・構成・展開でないと感動を呼ばない。

☆「シルバー楽団奮戦記」

人物造形をもっと具体的複合的多面的に行なう必要がある。内面の追求も足りない。

☆「深夜に寄り添う……」

不登校の子やいじめられている子を救いたいという作者の思いは伝わっている。いい作品だ。だが時間設定の枠が長すぎるし、登場人物が多すぎて、荒削りになっている。

☆「ジャンプ・アウト……」

構成と展開が回りくどい。解説に難渋する。

☆「夏の日」のマンガース」

主題が多岐に広がり散っている。突っ込みが浅いうえに狭い。子ども向けの読み物だ。

☆「世界が破損し始め……」

とりとめない空想の世界だ。読者の興味を掻き立てない。実在感を出すくふうが必要だ。

☆「侵」

題材は海浜⇨環境保護運動。だが海辺を守る動機や根拠や執念が薄い。新聞に書きたてられ非難されたことを苦にして主人公の女性（高校生）が運動から遠ざかる構成は軟弱で説得力がない。主人公が成人年齢十八歳に近いことやスウェーデンの少女グレタ・トゥーンベリさんの勇気を思うと主人公は、もういだけで美しさも輝きもない。弱いヤツでも悪いヤツでもいい。スカーレット（「風と共に去りぬ」）のような魅力ある主人公を作りなさい。

☆「雲外蒼天いちゆんど」

子ども向けの薄味の童話だ。家族や親子や兄弟の絆とか、生きる意味とか、大人向けの深く掘り下げた重厚な小説に挑んでほしい。

☆「死神代理人」

いじめへの反撃と男女の愛が主題である。物語の構造・道具・事件が軽くて浅い。もつと重く深い姿勢で臨みなさい。殺人の底の底に作者のヒューマニズムに立った眼が必要だ。

☆「鏡の世界」

いじめ、引きこもり、母と娘の絆を題材にしている。ありふれている。思い切って独創的な角度から深く激しく病的に彫り刻みなさい。内心を多面的複合的悪魔的に描きなさい。「お母さん」

と表記せずに母と書きなさい。

☆「春よ遼」

遼！^{はるか} ほとんどの人が読めない漢字を使つてはいけない。易しい漢字を用いなさい。都市化して便利さを追い求める世の中の流れを批判している。視点はいいが直線的論理的に描いている。文学の香りと味わいが必要だ。

☆「拝啓、平和を……」

太平洋戦争における特攻兵の死が主題である。使い古された題材を使い古された視点で書いている。真新しい視点が要だ。また特攻兵の心情や人々の心情を、もつと深く、もつと多面的に描かないと感動が湧き起こらない。

(たまよせ あきら／小説家・文芸評論家)

【小説部門】

第三回名桜文学賞講評

あずさゆみ

第三回の名桜文学賞には、昨年と同数の14作品の応募があった。数多くの応募に感謝したい。

まず最優秀賞の『都市のメタファー』について講評する。

「僕」は故郷の沖縄へ帰ろうと、タクシーで成田空港へと向かっている。車内での運転手との会話、彼女からの電話、亡き祖父の戦争体験のエピソードを通して、あらためて「僕」が沖縄と向かい合おうとする話である。

まず、設定がとても良い。空港へ向かうタクシーの車内という、時間と空間の縛りがある中で話が展開していくため、緊張感がある。沖縄を巡る複雑な事象や、やりきれない感情を、このページ数で書き切ったのは見事である。

冒頭からしばらくは、東京タワーや都市の描写が続く。好みの問題もあるだろうが、パラノイア的な饒舌さとかどさがあり、いささが辟易した。しかしながら、その氾濫する言葉こそが作品のエネルギーであると言えるのかもしれない。

引つかかったのは、「僕」とミサキとの会話である。ミサキがあまりにも話が通じない「おバカ」な女の子として描かれている。

難関大学に通っている論理的でおりこうな「僕」の対比として、肉感的で感情的な存在としての女性を描きたかったのかもしれないが、いささか前時代的に思えた。

また、『都市のメタファー』というタイトルは、作品の内容にそぐわないのではないかと感じた。

次に奨励賞の『雨に沈む』であるが、私はこの作品をもっとも評価した。

作者が、自分が書きたいと思った題材を、過不足なく描いている。

一本、線がきつちりと通っていて、構成もしつかりしており、とても読みやすい。

しかし、ここで描かれている「自分の書きたい世界」が狭いのではないかとの指摘があり、なるほどと思った。

文章にも破綻が無く、過不足も無い。が、逆に小説の世界が広がっていない。この作品について語ろうとしても、なかなか言葉が出てこない。あえて語りたい、深読みしたいところが探せないのだ。

また、三つ年下のいとこの情事という不穏なテーマながらも、あまりにサラサラと描かれすぎているところも、弱いと感じた。

賞を取られたお二人には、ぜひ今後も書き続けていたいただきたい。

選に漏れた作品ではあるが、『夏の日のマンガース』についてもとりあげたい。

友だちのいない孤独な少年が、ひとりの少女と出会って友情をはぐくむというストーリーだ。会話がやや単調で、話の流れに意外性がないなど欠点はあるものの、文章はのびやかで好ましかった。とりわけ、「ぼく」と少女とが雨の中で涙を流すシーンは美しく描かれていた。

今回応募のあった作品の中には、説明や蘊蓄ばかりが繰り返されていたり、己の信条を述べることに重きを置きすぎていたりなど、小説とは呼び難いものもあった。

あなた自身が感動したり面白いと思った小説を参考にして、小説とはどういうものであるかをじっくりと考えてほしい。

自分の頭にあるものを文章として生み出すのは大変な作業であるが、何度も推敲を繰り返しながら、あなたの中にある、また誰も見たことのない世界を生み出していきたい。

(あずさ ゆみ／作家)

【詩部門】

詩部門選考について

西原 裕美

今回は詩部門に十七作品の応募があった。全体的にこれまで何度か詩を書いてきたのだろうかと思わせる作品が多かった。

最優秀賞の「而今」琴森戀は、ほとんどの選考委員が最終選考に選んでおり決定した。ただし、題名の意味の不明瞭さが選考会で疑問視されたことや、私としては最後の「鉄の暴風雨と言われた沖縄戦」という言葉の選びがありきたりに感じられもした。しかし、他の作品とも比較し、この作品がただ沖縄戦を描いた作品ではなく、独自の視点でしっかりと描いており、一貫性も感じられ、最優秀に値すると考え選んでいる。

奨励賞の「南の島で悲劇のヒロインぶってみた」上原陽子は、時代を風刺しており、はつとさせられる作品である。昭和から現代まで、変わらず女性として生きていくことを考えさせられる作品である。冒頭の「沖縄県魅力度調査にて県民の9割が／誇りをもっている島に住んでいます」という書き出しが、女性の生きづらさを引き立たせており、皮肉が効いている。やや表現の仕方

や構成に気になりはあったものの、胸を打つ作品だった。

「新北風（みーにし）」森山高史は、選考会の中で「風だけでここまで書けるのか」「ユーモアもある」などの意見があがった。新北風が吹く中で、人々の生活や景色などが浮かび上がってくる作品である。またその新北風が、夏を終わらせたり、支配したり、思い上がったりなど、様々な表情を見せてくれる。

「水槽」藍原知音は、閉じられた世界から出ていこうとする姿が描かれているようだった。本人の中でその水槽についての思いを詩的な表現で、丁寧に綴られている。人魚になりきれない私の抱える葛藤は何だろうか。読者に委ねつつも、書き手には明確な何かが感じられる。詩に対する真摯な姿勢が感じられる。この作者の今後の作品にも非常に期待したい。

他に、最終選考の候補作として、「夜の浜辺で詩を燃やす」奥間空、「刻を進める貴女へ」木兎、「現代詩人の憂鬱」天海薫があった。

今年度の名桜文学賞へ応募してきた作品には、ずば抜けて優れていると思える作品は見られなかった。しかし、全体的に、ある程度詩を書いてきたのだろうと思わせる作品が多かった。圧倒的に目を引く作品とは、何がそうさせるのだろうか。それは個々人の詩の中に答えがあるのかもしれないが、個人的には自分の体験を積み重ねる中で、その体験や経験を土台にしながら言葉を

探していくことが必要なのかもしれないと感じる。特に沖縄文学には、体験から生まれる作品が多く、言葉の美しさや強さなどを追求するだけではない作品が多い。本当に伝えたいことは何なのかを考えることは、上手な詩を書くこととするよりも、時に重要かもしれない。体験し、感じ考えたことを自分でどれだけ咀嚼できるかが勝負になってくるのかもしれない。

また、作品を推敲してほしい。今回、荒削りに感じられる作品もあった。推敲する中で、自分の間違いに気付いたり、丁寧に書くことや、言葉の意味を考えることが出来るだろう。

今回受賞された方も、惜しくも受賞には届かなかった方も、自分の中から何が溢れ出すのか、観察し続け、良い作品を生み出してほしい。

(にしはら ゆみ／詩人)

【詩・エッセイ・短歌部門】

第三回作品審査講評

吉川 安一

私は、第三回（令和四年度）名桜大学文学賞作品の詩・エッセイ・短歌・の三部門を他の審査員と共に審査をした。審査方法として三部門とも応募作品の中から、上位三点を選出し各作品について寸評を施し、審査委員会に提出し、それを基に審査委員長を中心に審査を行った。その結果、どの部門の作品でも上位に評価された作品はほぼ一致していた。

審査を終えて思うことは、年次的に作品の内容や言語表現が豊かになりつつあることだ。創作活動の豊穡の土壌が形成されつつあることを実感している。

【詩部門】

詩部門の最優秀賞の「而今^{にこん}」は、悲惨な「鉄の暴風」と称された第二次世界大戦の実相が【神の宿る山は・神の宿る街は・神の宿る洞窟は・神の宿る浜辺は・神の宿る岩礁は・神の宿る森は】の構成で展開されている。戦争の悲惨さや当時の人々の姿が豊かな言語で如実に表現されている作品。

「写真」という作品は、ありのままを写した画像にはない、文字言語の奥深さを考えさせてく

れる。日常における生活被写体を言語で作品に置き換えることも勸めたい。

【エッセイ部門】

エッセイの部門では、最優秀賞の「月光色の布」のタイトルに心が奪われた。更に「月光色の布」を作者自身が織り上げる実践力、そしてその体験を言語芸術に完結させた作者の思考や創意の筆力に感銘を受けた。やんばるの自然の中で希望を実現していく崇高な日常生活をエッセイに昇華させている。

作者の「月光色の布」を実現する行動、やんばるでの開墾整地、芭蕉の植え付け、肥培管理、繊維の採り出し等が鮮明に描かれており、「月光色の布」の完成までの人力によるエネルギーの投資の尊さを感じた。

作品奨励賞「きおく」のエッセイは、「皆さんは、自分の記憶がなくなるかもしれない、消えるかもしれないと考えた事がありますか。記憶喪失とは映画や漫画の中の話だと思っていないませんか。私が十六歳で初めて経験した恐ろしくて、悲しい体験をこれから書くこうと思います。」で始まる作者自身の人生体験の作品。精神科や脳神経外科での診断結果に、家族・友人等の協力を得ながら本人は対応していくも、それは辛く苦しい。その経験で学んだ三つのことを以下のように綴っている。「その一つには、ストレスは絶対のためにいけないということです。無理することとは、自分が思っている以上に体にダメージがきます。二つには、周りの友達が助けを求めているら、全力で助けることです。人間は必ず助けが必要な時があります。三つには、どれだけ苦し

い状況でも、希望を捨てないことです。これは私が身を持って体験しました。どれだけ苦しく、もう生きたくないと思つていても明けない夜はないです。生きているだけで必ず楽になれる日がきます。私が学んだのはその三つの事です。」。生きるとは何かを考えさせられる。

【短歌部門】

短詩型文学の一つである短歌の審査を終えて思うことは、思想心情や社会的事象及び自然現象を三十一文字で表現する創作力の豊かさを読み取ることができたということである。

作品「^{はめ}一の五音」のタイトルは、五十音図・あ行の「あいうえお」の一拍を枕にした作品。一拍に込められた内容は、思慮深く含蓄のある言語で表現され、沖縄の過去、現在の世相が表現されている。

作品奨励賞「挽歌（挿し色）―屋良朝春先生へ―」は、故屋良朝春大画家への門下生による追悼歌であり、その心情を深く味わうことができた。

第三回名桜文学賞の応募作品は、全てが名桜大学の貴重な文学財だと捉えている。今年度も名桜文学の年輪が応募作品等で形成された。その年輪が年次的に美しく形成されることを祈念する。

（よしかわ やすいち／名桜大学 名誉教授）

【短歌部門】

短歌部門選評

屋良健一郎

「第三回名桜文学賞」は、詩部門十七編、短歌部門十五編、俳句部門三十九編の応募があった（昨年度の第二回は詩部門六十六編、短歌部門十一編、俳句部門七編）。選考会は、令和四年（二〇二二）十二月十八日に沖縄県立博物館・美術館の県民アトリエで実施。俳句部門は、おおしる建氏、西原裕美氏、屋良の三名で、詩部門と短歌部門はこの三名に吉川安一氏を加えた四名で選考した。これら三部門の選考は、例年通り、各選考委員が推薦する作品を三編ずつ挙げ、複数の選考委員が挙げた作品を中心に議論した。当然ながら、選考の際には作者名や年齢などの情報は伏せられている。

その結果、最優秀賞は「見送つてばかりだ」となった。五首のうち、一首目と二首目を引く。

サンエーのあさりでさえも息してたこと思いつつ外す呼吸器

君が見る景色を僕も見ているよ瞼の裏は眩しい闇だ

一首目、人工呼吸器を外すのは、つけていた人が亡くなったからであろう。スーパーの鮮魚売

場から人の死への飛躍が意外でもあり、またその飛躍により、感傷的になり過ぎることを回避している。その飛躍と淡さがこの一首を印象的なものになっている。五首連作の冒頭の歌として良い作だ。二首目は、一首としての独立性は弱いが、連作の中で力を持つ歌。「見ているよ」「眩しい闇だ」の口語体が、大切な人の死を適度な距離感で詠むこの連作の雰囲気づくりに貢献している。口語体といえ、一首目の「息してた」も案外重要なかもしれない。口語の力を感じさせる連作だ。

君といった喫煙所にてマルボロを（焼き滅ぼさむ天の火もがも）

この歌にも注目した。下句は有名な『万葉集』三七二四番歌「君が行く道の長手ながてを繰くり畳たたね焼き滅あめぼさむ天の火もがも」から。愛しい人の行く道を折り畳んで焼いてしまうような火が欲しい、という狭野弟上娘さののうとがみのうとめ子の歌。配流となる夫へ贈った歌という。配所へ至る道を焼くことで夫を取り戻したいという万葉の歌を踏まえて、死別を詠んだわけだ。「喫煙所にて」の「にて」など、上句はややぎこちなさもあり、その点が少し気になりはするものの、三七二四番歌の下句を取り込むことで、連作全体の雰囲気壊さない形で、死別の悲痛さを表現した作。

奨励賞の三作品の中では特に「挽歌「挿し色」―屋良朝春先生へ―」に注目した。画家である恩師を偲ぶ一連。

鮮やかな絵の具つきたる指先がJ A Z Zのリズムをかすかにきざむ

花曇り置き去られたるパレットの群青色は乾きつつ待つ

三首目と五首目を引いた。前者は、小気味いいリズムで絵を描いてゆく人の姿が思い浮かぶ、臨場感のある歌だ。「指先」に注目しながら、画家の姿全体や場の雰囲気立ち上げている点が良い。後者は、タイトル「挽歌」を踏まえるならば死を暗示させる歌となる。置き去りにされたパレットは、再び持ち主に持たれる日を待っているが、それが叶わないであろう寂しさが漂っている。タイトルを踏まえるとそうに読めるだろうが、もちろん、タイトルは別としても十分に味わいのある一首である。パレットに絵の具が残っているという点に、この絵が未完成であることが感じられるし、「群青色」という具体的な色が、パレットの主が描こうとしていたものを想像させる。そういった時間とドラマを内包する一首と読んだ。五首のうち四首が「ウ」の音（動詞の終止形）で終わるという点、三首が初句切れという点は、構成としては欠点と言えるが、内容面では印象的な連作であった。この連作の作者については、『琉球新報』二〇二三年二月二十八日付の二十七頁で報じられていた。

「見送ってばかりだ」も「挽歌「挿し色」―屋良朝春先生へ―」も共に挽歌である。挽歌は故人への思いが強すぎるあまり、他の人が共感するのが難しかったり、逆にありきたりな表現になってしまったりすることがある。しかし、この二作品は（あるいは俳句部門の最優秀賞の「初七日」も加えてもいいかもしれない）、死・故人との距離が適度にとられており、読ませる挽歌となっ

ている点が評価できる。

奨励賞「精靈せいれいの森もり」は堅実な作風であった。特に印象的だったのは次の作。

父の手をにぎり握りし山の奥あおくの戦場いくさばは　ここかも知れず

沖縄戦の経験を詠んだ作だろうか。「にぎり握りし」のひらがなと漢字の書き分けがポイント。戦争への不安が大きくなる様子が漢字表記に表れている。一字空けも、過去と現在の時間差を示すもの、「ここかも知れず」という不確かさが残る記憶の状況を示すものとして効いている。

ちなみに連作の一首目に「駆けぬけり」とある。「駆けぬく」は四段活用もあるので「駆けぬけり」が間違いというわけではないが、下二段活用で用いて「駆けぬけたり」とすることが一般的なように思う（四段活用と下二段活用で後に続く助動詞が異なる）。また、二首目に「楽しかり」と補助活用（カリ活用）の終止形が用いられている。補助活用の終止形は近現代の短歌では珍しくはない用法だが、古典文法としては一般的ではないだろう（補助活用には主に助動詞が続くため、「楽しかりけり」などとなる）。こういった文法的なところ、明確な誤りとも言い難い点をどう考えるかは、人によって異なるだろう。

奨励賞「月の砂」は性愛の場面をイメージさせる歌もあり、今回の応募作の中で独特な感性の一連であった。

月面へとどく梯子と信じてる互いの背骨をなぞって眠る

恋人同士の閉じられた世界で、互いの信賴が感じられる作。二人だけで完結している世界ゆえに美しく、尊い。これからが楽しみな作者だ。

他にも、確かな実力を感じさせる「港町」、詩的な雰囲気濃厚な「天体の魔女」にも注目した。回を重ねるごとに、作風が様々な作品が短歌部門に寄せられるようになったように思う。応募者の年齢層が広がり、また、普段は詩などの他ジャンルを作っている人が短歌部門に応募しているということもあるようだ。この多様さを喜ぶたい。

（やら けんいちろう／名城大学国際学群 上級准教授）

【エッセイ部門】

第三回名桜文学賞 エッセイ部門 選評

小番 達

今回の名桜文学賞のエッセイ部門には十四作品の応募があった。本文学賞を主催する名桜大学に所属する者として応募してくださった全ての方々に感謝申し上げる。

さて、最優秀賞を受賞した「月光色の布」は、妻が芭蕉布の工房を立ち上げたことを機に芭蕉布づくりに携わる様子を綴った作品である。今回の応募作の中では内容、文章ともに群を抜くものであった。芭蕉布づくりの工程、とりわけ糸芭蕉の栽培を通じて芭蕉布に対する、芭蕉布づくりに対する思いの変化が短いセンテンスを用いながら確かな筆致で叙述されている。当初の「私」は「芭蕉布そのものに興味は薄かった」が、美しい芭蕉布をつくるために不可欠な畑仕事に真摯に取り組むことで「自負」、「誇らし」さを感じるように変わってくる。その変化をもたらした作業経験や芭蕉布の特徴などが詳細に、そして丁寧に書き込まれている。また、本作品のタイトルの由来となるテレビ番組で取り上げられた俳句をめぐる一節、自作の名刺の存在を意識の変化に関連づける構成が効果的であった。総体的に高く評価できたが、細かなところでは語句の用法、形式段落の分け方等に修正すべきところがあった。

次に奨励賞受賞作の一つ「わたしの弟」は、発達障がいが疑われる弟と「私」をめぐる作品で

ある。弟に障がいがあるかもしれないと母から告げられた折の、驚きとともに得心できる部分もあるという複雑な胸の裡が語られるのを起点として、弟の言動がしつかりとわかりやすく表現されている点に注目した。障がいの症状などを調べた結果もあろうが、その観察眼の確かさは評価に値する。その一方で、段落分けをなされていないこと、地の文で常体・敬体の混用がみられることなど、文章を書く上での基本事項に関わる課題があった。

もう一つの奨励賞受賞作「きおく」は、大きなストレスが原因で記憶障がいとなった経験と、その経験から得られた学びについて書かれた作品である。自らが体験し、感じた事柄を平明な言葉を用いて具体的に書かれていることによって、友人との思い出、そして友人の存在自体の記憶を次第に失ってゆく不安、恐怖、苦しさ、悔しさ、悲しさのありようが、読み手に直截的に伝わってくる点にみるべきものがあつた。作品の内容自体には関わらないが、投稿された原稿に乱丁があつた。原稿を書き上げた後、投稿する直前まで細心の注意が求められる。

奨励賞を受賞した二作品はどちらも文章力を身につけるために研鑽を積む必要がある。だが、現代社会を生きる誰もが考えるべき問題―例えば、自己という存在、それを支えてくれる他者の存在など―について、自身の実体験を通して一つの作品として書き上げたことの意味は大きく、優れた作品執筆へつながる可能性を秘めている。こうした可能性は惜しくも選外となった応募者全てに備わっていると考ええる。今後さまざまな文章を読み、そして多くの文章を書くというインプット、アウトプットを是非繰り返し返してもらいたい。

（こつがい とおる／名桜大学国際学群 教授）

【俳句部門】

第三回名桜文学賞・俳句部門選評

おおしろ 建

俳句の募集は今回で四回目である。俳句部門の応募は三九作品であった。前回の応募が七作品であったから、応募数が増えて嬉しい限りである。高校生の応募が数多くあったことは、将来への期待感が膨らむ。これからもどしどし応募して欲しい。

俳句部門は五句で一作品の募集。五句をまとめたタイトルをつけることになっている。選考は作品の五句が、あるレベル以上で揃っているか。新しい発想の俳句があるか。また、作品の深み広がりがあるか、などが問われた。氏名は伏せての審査会であった。

最優秀賞 「初七日」 元澤 一樹（もとざわ かずき）

恋人の喪服のチャック上げて初夏

「お義母さん」と呼べば満ちゆく潮干潟

会いたい、と打っては消して夏の海

最優秀賞作品の五句から三句。恋人の母親が亡くなったことがテーマであろう。「初七日」までの寂しい風景が浮かぶ。一句目。恋人の喪服の背のチャックを上げてやる仕草に切なさや恋人への愛情を感じさせる。季節は梅雨がまだ始まらず、夏とはいってもまだ暑さは激しくない。二句目。「満ちゆく潮干潟」に義母との日々が懐かしく思い出される。干潟が満ち潮で埋まるように、義母との様々なできごとが押し寄せ胸が詰まってゆく。三句目。恋人や義母との思い出がある海に來ているのだろうか。恋人に会いたいのが、まだ母への氣持の整理がついていないのだろうかと思ひ、「会いたい」というメールを打つては消すというゆれる氣持を表現。残りの二句は「風死すや平和通りはどこですか」(夕立や58号線^ゴ今日も^{バチ}工事中)。作者は第一回名桜文学賞の短歌部門で奨励賞を受賞。第十四回名桜大学懸賞作品コンクールの詩部門で最優秀賞を大学四年で受賞。

奨励賞「戦争と〇和」外田 さし (ほかだ さし)

第二回の俳句部門、短歌部門の奨励賞を受賞。タイトルが興味深い。「戦争と平和」ではなく「戦争と〇和」。素直に「平和」と言えない時代と作者の屈折した氣持を表現。

「鳳仙花 ネイルを褒めてくれる祖母」。沖縄民謡の「ていんさぐぬ花」の歌にある「ていんさぐぬ花(ホウセンカ)や爪先に染みてい」を意識した句か。鳳仙花の汁を爪に塗って染めるとマジムン(悪霊)除けの効果があると信じられていた。爪に染めた鳳仙花と現代的なネイルとの対

比がおもしろい。古代と現代が交差したような感じた。

《曾祖父に似て帰省せずサイパンへ》。曾祖父は戦争中にサイパンで戦死したのだろうか。同じように親や兄弟の誰かが、還らぬ人となったのだろうか。

《ボケベルも軍人も死語ゆうな落つ》。「ボケベル」だけでなく「軍人も死語」が強烈である。一日で散つてしまう、ゆうなの花に託して非戦を訴えているのだろうか。

残り二句。《ハッシュタグつけて祈れば基地に喜雨》。《ラムネ瓶投けても来る^{きた}令和かな》。ハッシュタグという新語。ラムネ瓶という昭和感あふれる語を選ぶ感性が良い。

奨励賞「沖縄の姿 夏から秋」ルディセル 泰子（るでいせる やすこ）

四季のはつきりしない沖縄の季節。夏から秋への微妙な変化を詠んだ作品から三句。

《南風うけて琉球に古る水の神》。「水の神」は井戸のことであろうか。水が貴重であった時代、井戸は大切なものであった。そんな水の神も南風に優しく吹かれ、琉球という国の中で時を経て古びて来たというのであろうか。

《片陰のとぎれとぎれて島の道》。沖縄の夏の午後は陽ざしが強い。陽のあたるところと日陰との落差が大きい。明るくなったり、暗くなったりが激しい。その様が「とぎれとぎれて島の道」の表現になったのであろう。

〈赤蜻蛉無量なりけり摩文仁丘〉。摩文仁の丘に赤蜻蛉が数えられないほど飛び回っている。摩文仁は沖繩戦での最大の激戦地である。赤蜻蛉は亡くなった人たちの霊なのか。それとも慰霊のために飛んでいるのだろうか。赤蜻蛉は渦巻いて澄み切った空へ昇る。

奨励賞「そつと歌」 知名 凜音（ちな りんね）

審査を終えたあとで高校生の俳句と知って驚いた。季語をよく勉強していると感心した。

〈抱きしめてシヨールを終しまふ昼下がり〉。「抱きしめて」にシヨールへの感謝の気持が表れている。お昼まで暖かく守ってくれてありがとうねと。

〈坂道でそつと歌いて冬ぬくし〉。冬であるのに暖かい一日。思わず、坂道の途中で、そつと歌いたくなったのであろう。多感な青春のある一ページの風景である。

〈浮寝うきねどり鳥疲れたるとき胃のうごく〉。「浮寝鳥」と「疲れたるとき胃のうごく」の取り合わせに意外性があるとおもしろい。浮寝鳥は泣き疲れて寝てしまったのだろうか。

奨励賞「夏」 佐藤 りいら（さとう りいら）

高校生の俳句。日常の中の、ささやかな夏を感じた作品から三句。

（明け方の寝ぼけ眼に聞く遠雷）。遠くで鳴る雷を寝ぼけ眼で聞く明け方。一日の始まりを感じながらも、また夢の中へ迷い込むのだろうか。健全な高校生の姿か。

（夏風にはためくシャツの皺のあと）。はためくシャツは洗濯したあとに干したもののか。だが皺は、なかなか消えない。激しく動き回った青春の名残の皺のあとなのだろうか。

（カーテンの隙間から覗く夏の空）。部屋に籠もったまま外へ出ることができない。そんな鬱屈した気持ちのまま、カーテンの隙間から覗く夏の空は眩しいばかりだ。

（おおしろ けん／俳人）

【琉歌部門】

第三回 名桜大学懸賞作品コンクール琉歌部門講評

波照間永吉

応募作をひとわたり拝見して、今年応募された方々が、相当に琉歌に親しんだ方々であることがすぐに分かった。すべての作品に安心して接することができた。そういうことであるから、十一名の応募者の四六作品の中から受賞作品を選ぶことは簡単なことではなかった。そのような中で私は自身の第一次選考で先ず十二首を選んで、これを細かに検討してみた。歌のしらべや、言葉の美しさ、語法の妥当性などをみた。その結果、五作品が残った。この五作品を幾度も読み返し、暗誦し、声に出して読んでみた。歌のテーマを見わたし、私自身の心持ちに添う歌を探した。その結果、四作品を受賞作としてどうしても残したいと思った。こうして選考会に臨んだ。そして選ばれたのが今日の受賞された方々の作品である。

最優秀賞には「肌^{はだ}に涼^{しだ}すだ」と 夜^ゆ夜^ゆの風^{かぜ}添^かへば 島^{しま}渡^{わた}て行き^いちゆる 鳥^とも鵜^{いん}で「が選^えばれた。ミーニシが吹きそめ夜風が肌に涼しく添うてくる。この時期、南に渡って行くサシバの群れが空に姿を現す。かつての沖繩の秋の景色である。作者は、その南への命がけの旅をするサシバを想う。長い旅路を渡る動物に思いを寄せる。ただこれだけのことであるが、「鳥^とも鵜^{いん}で」という、接続形で一首を締めて余韻を残し、サシバの無事を祈る優しい心を思わせることに成功している。入

賞作には①「思ひ焦^くがれゆる 此^くの身^み知^しちをゆら 恋路^{くいにちう}飛^とび交^かゆる 闇^{やみ}の螢^{へい}」、②「蒲葵^{ふあ}ぬ葉^はぬ芳^{かほ}さ 涼風^{しだかじ}ぬあまさ 母^ふが手^て作^しいぬ 愛^{かな}し蒲葵^{ふあ}扇^{おし}」、③「霧^{きり}晴^はりてい東^{あづ} 太陽^{たいやう}拝^がてい世^よ間^まぬ 瀧^たやしさ有^ありとう 思^{おも}ひ込^こみてい」が選ばれた。第一の作品は今回の応募者の中では最も力量を感じさせる作者の歌とみた。非の打ち所の無い作品で、むしろそのことが欠点になるかと思われる程の秀作である。ただ、惜しかったのは、テーマが和歌世界などとも共通していて、既視感を覚えさせたところであった。第二の作品は、母を偲ぶ歌であるが、上句の「蒲葵^{ふあ}ぬ葉^はぬ芳^{かほ}さ 涼風^{しだかじ}ぬあまさ」が、読者の五感を心地よく刺激する。そして、これを下句の母への思いへ繋いでいくところが優れている。ただ、結句の音数合わせが難点である。第三の作品は、テーマ性を評価した。現在の世界情勢・ウクライナ戦争が詠まれているが、その思いは万人の思いであるはずだ。応募作品中、本歌のみがこれを成したことを評価した。

（はてるま えいきち／名桜大学大学院国際文化研究科博士後期課程 教授）

【琉歌部門】

名桜文学賞二〇二二（琉歌部門）選評

照屋 理

昨年度琉歌部門は応募も少なく、作品自体も名桜文学賞受賞にいたる作品も残念ながら見当たらないという年であった。琉歌部門が創設されて今年度で四度目の募集となった今回、応募の多寡がまず懸念されたが、これまでで最多の11件の応募があった。着実に知名度が上がってきていることが実感され、今後の更なる応募が期待された。

最優秀の作品は、「島言葉と季節」と題された作品群の中の一首「肌はだに涼しだすだと夜の風ゆゆぬかじ添へば 島渡しまわたて行きいゆる 鳥とりも軀みて」が選ばれた。暑い時期の長い沖縄と言えども、10月も末になると夜風が涼しくなってくる。そして11月に入ると、長距離移動に備え肥え太ったサシバが、東北地方から時期を違えず渡ってきて、独特の鳴き声で南西諸島に冬の到来を告げる。季節感に乏しいとも言われる沖縄であるが、季節は島にも間違いなく巡ってくる。その自然の摂理にもし気がけないとすれば、自然に触れることなく、あるいは自然を無視して生きる現代人の側に原因があるのかもしれない。そんな島の短い秋を、敏感にすくい取った作品である。

奨励賞は今回3作品が選ばれた。一首目の「蒲葵ふあぬ葉かばぬ芳しかさ 涼風したかじぬあまさ 母ははが手て作つくいぬ 愛かなし蒲葵お扇し」は、最優秀作品と同じく、沖縄の涼をテーマにした作品である。夏の暑さが厳しいこ

の地域では、どの家庭でもクバオージ（蒲葵扇）などと称される扇を置いていることが多い。クバオージは、蒲葵の、まだ開ききつていない若く柔らかな葉を切り取って扇の形に切り出し、莖座の上に広げ、置き石をして乾かすなどして各家庭で作った。できあがったクバオージは、蒲葵の葉の芳ばしい香りをまとっている。作中では、母親が作ってくれた扇を取り上げており、その扇で扇いだ風を「涼風のあまさ」と表現している。母親の愛情とはクバオージにも込められ、その扇から生み出される風にも移って作者を包み込んでいる。この情景の描写が温かく心地よい。

奨励賞二首目は、「霧晴れてい東太陽^{ちりは}^{あが}^{てい}^{だうが}^{うが}世間ぬ灘^{なだ}やし^あ有り^{うむ}とう思^{うむ}込^くみてい」である。奄美から八重山諸島までを含む琉球文化圏では、神事等において太陽を拝む場面があることがある。そして、基本的には東方から上がってくる太陽を拝むのであり、西へ沈む太陽は拝むことはない。この作品内でも朝もやが晴れてゆき、東方から昇ってくる「東太陽」を拝んでと、同様の概念が歌いこまれていることが分かる。コロナや戦争で日々多くの命が奪われるこの時代において、昇る太陽に「灘易さあれ」と思いをこめて願う作者の、祈るような心情に共感が広がる作品である。

奨励賞三首目となった「思^{うむ}い焦^くがれゆる此^くの身^み知^しちをゆら恋^く路^い飛^じび交^うゆる闇^{やみ}の螢^{へい}」は、琉歌を作り慣れた方の作品であろうことが予想された。他の作品がいわゆる三母音表記であるのに比して、本作品は五母音表記となっており、仮名遣い一つとってみても、先達の琉歌作品に多く触れていることがにじみ出ているように思う。また「思^{うむ}い焦^くがれる」と、身を焦がして飛ぶ「螢」がかけられており、技巧的にも高いレベルであるように感じられる。

以上が、上位四首の評言である。

今回は五〇首を超える作品を評価することとなったが、上記四首以外にも興味深い作品や目を引く作品も多くあった。ぜひまた応募していただきたいと思う。なお今回も、若手によるとみられる応募作品が散見された。昨年度の繰り返しになるが、琉歌の表現や方言の言い回しは、講義を通して学習する以外に、近世、近代の先人の作品に接すれば学ぶことができる。琉歌の歌人と呼ばれる先達の作品にもっともっと触れてほしい。引き続きの応募を心より期待している。

（てるや まこと／名城大学国際学群 上級准教授）

第三回(令和四年度)

名桜文学賞



作品募集

■応募要領

①「小説部門」

- 400字詰原稿用紙で30～50枚程度。(原稿用紙使用の場合は必ずA4サイズを使用すること。)ワープ原稿は、1行30字×40行を目安にA4判のマス目のない紙に書く。応募は1人1作品とする。
- 表紙に題名、タイトル、氏名または筆名(ふりがな)、および400字詰原稿枚数を明記する。
- 原稿の末尾にページを覚えて、住所、電話番号、氏名(本名・ふりがな)、年齢、職業(学校名・学年)を付記する。
- 原稿には必ず通し番号(ページ数)を入れて、右頁を綴じる。

②「短歌部門」

- 短歌は5首での応募とし、400字詰原稿用紙1枚に5首を記す(縦書き)。ワープ原稿は、行数・行数の設定は自由とするが、1枚に5首を記入すること。応募は1人1組(5首以上)とする。
- 表紙に題名、5首をひとまとめたタイトル、氏名または筆名(ふりがな)を明記する。
- 原稿の末尾にページを覚えて、住所、電話番号、氏名(本名・ふりがな)、年齢、職業(学校名・学年)を付記する。

③「俳句部門」

- 俳句は5句での応募とし、400字詰原稿用紙1枚に5句を記す(縦書き)。ワープ原稿は、行数・行数の設定は自由とするが、1枚に5句を記入すること。応募は1人1組(5句以上)とする。
- 表紙に題名、5句をひとまとめたタイトル、氏名または筆名(ふりがな)を明記する。
- 原稿の末尾にページを覚えて、住所、電話番号、氏名(本名・ふりがな)、年齢、職業(学校名・学年)を付記する。

■応募資格

- ① 中・高・大生等(高校生)
- ② 中・高・大生等(高校生)
- ③ 一般社会人(中・高・大生等)

応募条件

- 応募作品は未発表の作品(新聞・雑誌・同人誌やホームページ・ブログ・SNSなどで発表していない作品)に限ります。
- 応募に1作品につき応募料を徴収します。
- 応募金は本校文学賞で最優秀賞を受賞したものは1回限りへの応募にのみ充当します。

④「詩部門」

- 400字詰原稿用紙で3枚以内(縦書き)。ワープ原稿は、1行20字×20行のマス目を使用し、A4判の紙に書く。応募は1人1組とする。
- 表紙に題名、タイトル、氏名または筆名(ふりがな)を明記する。
- 原稿の末尾にページを覚えて、住所、電話番号、氏名(本名・ふりがな)、年齢、職業(学校名・学年)を付記する。
- 原稿には必ず通し番号(ページ数)を入れて、右頁を綴じる。

⑤「エッセイ部門」

- 400字詰原稿用紙で5～10枚程度。(原稿用紙使用の場合は必ずA4サイズを使用すること。)ワープ原稿は、1行30字×40行を目安にA4判のマス目のない紙に書く。応募は1人1作品とする。
- 表紙に題名、タイトル、氏名または筆名(ふりがな)、および400字詰原稿枚数を明記する。
- 原稿の末尾にページを覚えて、住所、電話番号、氏名(本名・ふりがな)、年齢、職業(学校名・学年)を付記する。
- 原稿には必ず通し番号(ページ数)を入れて、右頁を綴じる。

⑥「琉歌部門」

- 琉歌は5首以内(1首から5首まで)での応募とし、400字詰原稿用紙1枚に5首を記す(縦書き)。ワープ原稿は、行数・行数の設定は自由とするが、1枚に5首を記入すること。応募は1人1組(5首以上)とする。
- 表紙に題名、5首をひとまとめたタイトル、氏名または筆名(ふりがな)を明記する。
- 原稿の末尾にページを覚えて、住所、電話番号、氏名(本名・ふりがな)、年齢、職業(学校名・学年)を付記する。

■応募期間および表彰式

応募期間:2022年9月 5日(月)～10月28日(金) [郵付可]
表彰式:2023年2月11日(土)

注 記

- 本賞募集について問い合わせは、一切受けません。
- 応募に関する個人情報(応募者名)は応募後に返却しません。
- 当賞募集、表彰式等に関するお問い合わせは、本賞事務局にお願いします。
- 当賞は1人1組につき1作品に限ります。
- 応募作品に際しては、応募者の同意(親権者・同意者)の捺印を必要とします。
- 受賞作品に際しては、応募者の同意(親権者・同意者)の捺印を必要とします。
- 受賞作品に際しては、応募者の同意(親権者・同意者)の捺印を必要とします。

作品送付先および問い合わせ先 名桜大学附属図書館 名桜文学賞作品係
〒850-8585 内陸部名桜市大字2120-1 電話:0980-81-3982 名桜大学HP: <http://www.sakurabi.ac.jp/>



※応募要領

名桜大学
MIYAKURA UNIVERSITY

名桜文学賞表彰式開催

二〇二三年二月十一日（土）午前十一時より、第三回名桜文学賞表彰式が名桜大学学生会館六階スカイホールにおいて学内外関係者が出席し三年振りに開催されました。

「名桜文学賞」は第十五回（二〇一九年）まで続いていた「名桜大学懸賞作品コンクール」を名称変更（衣替え）して二〇二〇年以降、コロナ禍により対面による表彰式の開催を二回にわたり控えておりましたが、この度晴れの表彰式がとり行われました。

本年度第三回（令和四年度）名桜文学賞には、六部門（小説、詩、短歌、エッセイ、俳句、琉歌）で応募総数一四五編の作品が寄せられ、選考委員一〇名による厳正な審査を経て二二名の受賞（最優秀賞六、奨励賞十六）が決定され、当日は、受賞者、関係者を含め約四〇

名が式典に参加して表彰式が行われました。

表彰式に先立ち名桜文学賞選考審査会を代表して、波照間永吉先生のあいさつが行われ、出席された審査員（七名）全員から丁寧な講評が行われ、受賞者各位に賞状及び副賞の授与が行われました。式典終了後、受賞者、審査員全員での記念写真撮影が行われた後も、熱心な受賞者はしばらくの間、審査された先生方との情報交換が少しの間行われました。

なお、受賞された二二名の作品につきましては、「第三回名桜文学賞受賞作品集」として本年度内に刊行の予定です。



第3回名桜文学賞表彰式（2023年2月11日） 於：名桜大学学生会館6階スカイホール

第三回名桜文学賞受賞作品集

(名桜大学附属図書館報 特別号 令和四年度)

発行日

令和五年三月三十一日

編集 名桜大学附属図書館

発行 公立大学法人名桜大学

〒九〇五-1858

沖縄県名護市字為又1-2-1

印刷

株式会社 国際印刷

名桜大学附属図書館報 特別号 令和4年度

